



怪盗 韋駄天



古野なおゆき

1 予告状

名古屋、栄の総合百貨店、末盛屋の最上階にある展示場は大勢の客で賑わっていた。

末盛屋では毎年この頃、宝飾品の展示会を行っていた。名古屋でも一、二を争う宝飾品店、千歳堂が後援をしていて千歳堂の宝飾品がたくさん出店されていた。

その中でも“ナイルの涙”という三十カラットもあるような大粒のダイヤモンドが、この展示会の最大の目玉であった。

この“ナイルの涙”は時価にすれば十億円はくだらないといわれ、普段は千歳堂の大きな金庫の中に厳重に保管されているのだが、末盛屋の展示会の目玉として初めて公開されたのである。このダイヤモンドを見たさに大勢の客が、この末盛屋の最上階の展示会場に押し寄せてきたのだ。“ナイルの涙”は精度の高い警報機付きのガラスケースに収められ、そして常時二人の警備員が監視していた。そのためこの宝石を盗むのは不可能だろうと言われていた。

ところがこの“ナイルの涙”の持ち主である千歳堂の社長、小里育真氏のもとに一通の予告状が届いたのである。千歳堂は東区泉、東片端に本店があった。

小里育真氏は四十六歳。有名な宝飾品店の社長らしくでっぷりとしていて貫禄があった。

「明日、午後八時、“ナイルの涙”をいただきに参上いたします。怪盗 韋駄天」

怪盗 韋駄天。それは近年名古屋の街を騒がしている有名な泥棒である。絵画や彫刻などの美術品や仏像、茶碗などの古美術、そして宝飾品を狙い、犯行の直前にこのように予告状を送りつけることで有名な盗賊であった。

この予告状を見た千歳堂の社長、小里育真氏は目が飛び出んばかりに驚いた。

「なんだ、これは！ 怪盗 韋駄天が“ナイルの涙”を盗もうとしている。おい、君。峯田をすぐに呼んでくれ！」

峯田とは小里育真氏の右腕で、千歳堂の専務をしている。この“ナイルの涙”を手に入れたのも、有能な部下の峯田三郎氏のお陰であった。

「峯田専務なら、営業でお客様の所に参られていますか・・・」

「いつ戻ってくるのだ？」

「さあ、そろそろ戻られるのでは・・・」

社員は壁に掛かっている時計を見ながら、不安そうに言った。

「そうか、それなら戻ってきたらすぐここへ来るように言ってくれ」

「はい、わかりました」

小里育真氏は予告状のことを警察に電話で連絡したらどうか迷った。とにかく峯田専務に話をしてから決めようと思った、と言うのも警察を信用してなかったからだ。

脅迫状の不安からじっとしていることができず、社長室の中をせわしく動き回った。

専務の峯田三郎が戻ってきたのはそれから十分ほどしてからだ。

「社長、何か大変なことが起こったようすな・・・？」

社員から話を聞いた峯田三郎が慌てて社長室に入ってきた。峯田三郎は社長の小里育真よりも十歳年上の五十六歳。小柄だが目の鋭いかにも切れ者といった感じである。先代社長、つまり

育真氏の父親の代から千歳堂で働いていた。この千歳堂を支えているのは峯田三郎専務のお陰だと社内では言われている。そのため小里社長は何かにつけて峯田専務に相談していた。

「ああ、峯田か。怪盗 韋駄天からこのような予告状が届いたんだ」

小里社長は届いた予告状を峯田専務に見せた。峯田専務は手にすると、

「社長、これは大変です。警察には届けましたか？」

「いや、警察にはまだ連絡をしていない」

「それではすぐに連絡をしてください。警察だけでは不安ですな。なんでもこの怪盗 韋駄天、警察でも手におえないほど鮮やかに狙ったものを盗んでいきます。事実、白壁町の事件では高価な茶器が警察の厳重な警備の中、盗まれてしまいました。警察だけでは当てになりません。私立探偵を雇ったらどうですか？ 私、知り合いに外内祐太郎という私立探偵がいます。この外内という探偵は意外に有能で、以前、昭和区南山の富豪の邸宅から怪盗韋駄天に狙われた高価な絵画を守ったことで知られています」

その事件は新聞やテレビのニュースでデカデカと取り上げられたので、小里育真氏も良く知っていた。

「そうか、君は外内祐太郎の知り合いだったのか。あの事件のことは私も知っている。そうか、それなら外内探偵に早速頼んでくれ」

「でも社長。外内探偵を雇うことになると、少々経費がかかりますよ。あの事件のあと、彼に仕事の依頼が増えて忙しいみたいです。このように急を要する仕事となると、余分に依頼料を払わねばならないと思いますが・・・」

「経費はいくらかかっても構わない」

今まで沈んでいた表情の小里社長であったが、外内探偵の話が出た途端、パッと明るくなった。怪盗 韋駄天に対する警察の失敗が続いて、警察に対して不信感を持っていた小里社長であったが、今の彼は藁にも縋りたい心境だった。小里社長にとって私立探偵、外内祐太郎はそのすがりつきたい藁であったのだ。

「それでは早速、外内探偵の事務所へ依頼してきます」

「私も一緒に行こう」

「いいえ、私だけで結構です。外内探偵は初対面の人には必要以上に警戒します。ここは私にお任せくださいませ。外内探偵を連れて来ますから、それから末盛屋に行きましょう」

「そうか、それでは頼んだぞ」

峯田専務は千歳堂の本店を出て行った。

それから四十分ほどして、千歳堂本店に一人の美しい女性が入って来た。小里育真氏の一人娘、瑠璃子さんであった。瑠璃子さんは二十一歳の女子大生である。背が高くすらりとしたスタイル。その美貌は評判で、美人コンテスト出場し優勝したことも何度もあった。そして千歳堂の宣伝ポスターにも使われている。

瑠璃子さんは小里社長に何か用事があったのか、社長室に入ってきた。

「お父様、そんなにそわそわして、何かありましたの？」

社長室に入った瑠璃子さんは、父、小里育真氏の表情が暗く、何か不安げでいるのを悟り、心

配そうに聞いてみた。

「いや、何でもない。もうすぐ大事なお客様が来る。話は家に戻ってからにしてくれ」

小里氏は娘の話を書く耳も持たないようだ。瑠璃子さんを社長室から追い出そうとした。

その時、ちょうど外内探偵の事務所に“ナイルの涙”の警備を依頼しに行っていた峯田専務が、外内祐太郎探偵を連れて戻ってきた。

「あっ、峯田のおじさま、こんにちは・・・あの、そちらの方は？」

瑠璃子さんは峯田の後ろにいる見知らぬ人物を不審に思った。小柄だがソフト帽をかぶりびしっと高価な背広を着こなした上品そうな三十歳ぐらいの紳士である。

「あっ、瑠璃子お嬢様。こちらの方は私立探偵の外内祐太郎さんです」

「私立探偵の外内祐太郎さん・・・？ 以前新聞で読んだことがあります。でも何かありましたの？」

瑠璃子さんは心配そうに峯田専務に聞いた。峯田専務の後ろにいた外内探偵の目が輝く。帽子をとると少しパーマがかかった頭髪が現れた。そして瑠璃子さんに一礼した。

「峯田さん・・・そちらの美しいお嬢さんはどちら様かな？」

「ああ、外内さん。こちらは小里社長のお嬢様で、瑠璃子お嬢様と言います」

「瑠璃子・・・お前はもう家に戻れ。これから大事な用事があるんだ。お前の話は家に戻ってから聞くよ。それまで待ってくれ」

外内探偵の登場に、瑠璃子さんはこの千歳堂で何かただならぬことが起ころうとしていることを予感し、心配そうに父親を見ていた。しかし小里社長が鋭い目つきで瑠璃子さんを睨みつけるので、彼女は渋々社長室を出て行った。

「美しいお嬢様ですな。瑠璃子さんですか、綺麗な名前ですね。何か話したいことがあったようですが、良かったですか？」

「いや、お恥ずかしい。甘やかしたせいで我が儘に育ってしまった。たぶん話というのは見合いのことでしょう。瑠璃子には大学を出たらすぐ結婚させたい。婿にはいずれこの千歳堂を継いでもらうから、有能な人物を選びたいと思っていますのです」

「お嬢様はまだ若いでしょう。結婚なんて早いのではないですか」

外内探偵は美しい瑠璃子さんの姿を思い出しながら言った。彼は瑠璃子さんがお見合いをして大学を出ると即結婚することに、すこしショックだったのだ。早い話が彼はこの瑠璃子さんに一目惚れをしたようだ。

「いや、結婚なんて早いに越したことはないよ。最近は晩婚化が進んでなかなか結婚しない。仕事にかまけて家に収まるのがいやなのです。気が付いたら三十を過ぎて慌てて探してもなかなかいい男は見つからない。と言うよりも返って目が肥えてそんじょそこの男はつまらなく見えてしまう。気が付いたら四十です、これでは普通に子供は産めない。女性も三十半ばを過ぎると普通に妊娠できないそうですな・・・卵子も年を取ってしまうみたいです。まあ、女は結婚は早いに越したことはありませんよ」

小里育真氏は女性に結婚に早いに越したことがないと念を押した。外内探偵は少し不満だったが、本題に入るように話を進めた。

「それでは本題に入ります。例の予告状を見せてもらえませんか？」

「ああ、そうだ。これです、これが予告状です」

小里社長は届いた予告状を外内探偵に手渡した。探偵はそれをじっと見た。

「なるほど、これが怪盗 韋駄天からの予告状ですか。この予告状は誰かに見せましたか？」

「いえ、峯田以外には誰にも知らせていません」

「警察には知らせましたか？」

「いえ、まだです。私は警察を信用していません。最近怪盗 韋駄天に対して黒星が続いていることもあるのだが、以前私どもの店で盗難にあったときに、あらぬ疑いをかけられたことがあるのです。それで警察に通報するのを躊躇ったのです」

峯田専務が当時の状況を事細かに説明した。

「そんなことがあったのですか。警察には私の方から連絡しましょう。愛知県警では怪盗 韋駄天には並木警部が当たっています。並木警部は私も良く知っています。なかなかの好人物、以前に味あわされたような不快な思いはさせませんよ。それに怪盗 韋駄天にまんまと盗まれていたのは前任者の責任です。並木警部が担当になってからはそのようなへまはしていませんよ」

警察に対する通報は外内探偵に任せた。外内警部は電話を取り、警察に通報した。

「並木警部は三十分後に栄の末盛屋デパートに来るそうです。私達も末盛屋デパートに行きましょう」

外内探偵と小里社長、そして峯田専務の三人は東片端の千歳堂を後にしてタクシーで栄の末盛屋デパートへと向かった。

2 末盛屋百貨店

末盛屋デパートには、小里社長が直々に連絡を入れていたので、三人が到着すると、社長の守岡耕太郎が直々に出迎えた。

「千歳堂さん、大変なことになりましたな。あの“ナイルの涙”を怪盗 韋駄天が狙っているのですか。“ナイルの涙”はこの宝飾品展示会での最大の目玉。警備には万全を尽くしていますが、怪盗 韋駄天は警察の裏をかき、狙ったものは必ず盗み取ると言われています。警備陣をもっと増やすしかないですな」

守岡末盛屋社長は心配そうに言いながら、三人を最上階の展示会場に案内した。

「こちらは外内探偵といまして、昭和区の南山の事件で、怪盗 韋駄天から見事に絵画を守った私立探偵です。愛知県警にも知り合いが多く、怪盗 韋駄天担当の並木警部とも顔なじみのようです」

「ああ、あなたが外内探偵ですか。あなたの活躍は新聞やテレビでお聞きしています。あなたがいれば百人力だ。怪盗 韋駄天から“ナイルの涙”をお守りください」

守岡社長も、一流総合百貨店の名誉にかけて、“ナイルの涙”を怪盗 韋駄天から守りたかったのだ。そのためには警察よりも実績のある外内探偵を信頼した。

「いや、あの事件はたまたまぐれだったのです。しかし警察と力を合わせ、全力を尽くして、怪盗 韋駄天から“ナイルの涙”をお守りします」

外内探偵は照れ臭そうにしながら、自信を持って言った。

「さあ、ここが展示会場です。警備員も常時二人を配備していますが、千歳堂さんから怪盗 韋駄天の話を知り、警備会社と相談して、警備員をさらに増員してもらうことになりました。それに防犯ケースも精度の高いものに換えてもらうように手配しています」

展示会場は相変わらず、大勢の客でごった返していた。とくにその“ナイルの涙”の前は身動きが取れぬほど詰めかけていた。

そのうち愛知県警から並木警部が部下の加藤刑事を連れて乗り込んできた。外内探偵の顔を見ると近づいてきて挨拶をした。

「いやあ、外内探偵、いつぞやお世話になりました。そちらの方は？」

「こちらが千歳堂の小里社長と峯田専務。そしてこちらがこの末盛屋の守岡社長。守岡社長は警備会社と相談をして警備員を増員し、さらに高精度の防犯ケースを用意してくれるそうです」

「末盛屋の守岡です。警備会社と相談して、警備員を増員してもらうようにしました。それにさらに高精度の防犯ケースを頼んでいます。閉店後に新しいケースを持って来てもらい、“ナイルの涙”を入れ替えます」

「そうですか。私も愛知県警も全力を尽くして“ナイルの涙”をお守りします。犯行予告は明日の夜八時ですね。明日は私服の刑事を十人ほど配置します。さらに機動隊を三十人ほど、この百貨店の近くに詰めさせます。とにかく万全を尽くします」

並木警部はにやりと笑い、自信を持って言った。

さらに警備会社の社員が、新しい防犯ケースを持ち込んできた。営業中は入れ替えることがで

きないので、今はストックヤードに置かれている。

外内探偵と並木警部、それに千歳堂の小里社長と峯田専務、そして末盛屋の守岡社長が警備会社の社員の説明を受けた。

「これが新しい防犯ケースです。ガラスは防弾ガラスでできています。四十五口径の銃弾でも貫通することはできません。ガラスケースは二つの鍵とダイヤルで開くようになっています。もし解錠されてもレーザーセンサーがついているので、指が触れただけでもアラームがけたたましく鳴り、警備本部にも通知されるようになっています。この防犯ケースから盗み出すのは絶対に不可能です。それに警備員も倍増します。特にこの“ナイルの涙”のケースの回りには常時四人の警備員を配置します。これなら怪盗 韋駄天も手が出ないでしょう」

警備会社の社員は絶対に安全だと宣言した。

「これだけの警備なら完璧でしょう。怪盗 韋駄天め、来るなら来やがれ！ いつでも逮捕してやるぞ！」

並木警部は自信満々に豪語した。

閉店と同時に、警備会社の人ケースを入れ替えた。そして並木警部や外内探偵、警備会社の警備主任、そして小里社長、峯田専務、守岡末盛屋社長達の監視の下、“ナイルの涙”を古いケースから新しいケースに入れ替えた。

「怪盗 韋駄天は警備の裏をかく。予告状では明日の夜八時にいただきに行くとき書きながら、実際にはそれ以前にすでに盗んでいるケースもある。奴との戦いはすでに始まっている。警備が手薄の時を狙ってくる可能性がある。今晚が山であろう。とにかく警備に当たる人には頑張って“ナイルの涙”を守って欲しい」

並木警部は徹夜で警備に当たる警察官そして警備会社の社員、総勢二十人に向かいねぎらいの言葉をかけて励ました。

末盛屋百貨店の最上階の展示場では、常時数人の警備員が交替で一晩中監視に当たったお陰で何事もなく翌日の開店を迎えることができた。

午前十時の百貨店の開店と同時に、大勢の客がどっと入場してきた。その客に紛れて、怪盗 韋駄天が侵入してくるかも知れない。そちらの方が警備は難しいかも知れない。警備する方も、ごった返す客に紛れて私服の刑事、警備員が大勢警備に当たっていた。

何事もなく、時間は過ぎていった。昼になり、そして一時、二時、三時。何も起こらなかった。午後六時のことである、犯行予告の八時まであと二時間、展示場はだんだんと混み合ってきた。仕事帰りの人が入場してきたのだ。

一つの出来事があった。中年の男が警備員に詰めかかったのだ。すわ、怪盗 韋駄天の登場か！ 警備に当たっている制服の警備員、私服の刑事、警備員に緊張が走った。男は複数の警備員に連れられて、事務所に引っ張られた。

その男は単なる酔っぱらいであった。なかなか観客が進まないのにイライラして近くの警備員に不満をぶつけたのだった。

「もうあと二時間。何があるかわからない。気を引き締めて警備に当たってくれ」

並木警部はバックヤードの事務所で、そこに詰めている刑事、警備員に言った。

それから二時間が過ぎた。別に何事も起こらず午後八時の犯行予告時間を迎えた。末盛屋百貨店は閉店時間を迎え、大勢の客達は百貨店を後にした。

ついさっきまで大勢の客がいた宝飾品店の展示会場も今は客がひとりもおらず、警備員と私服の刑事、警備員が問題の“ナイルの涙”を納めている防犯ケースの前に集まった。「怪盗 韋駄天め、私たちの警備に怖じけついて手も足もでなかったな、たいしたことのない奴だ。ハ、ハ、ハ！」

並木警部は豪快に笑った。しかし隣りに居合わせた外内探偵は、用心深くまだ警戒心を解いていないのか、神妙な顔つきだ。

「警部、まだわかりませんぞ。怪盗 韋駄天は警察の裏をかきますからな。この“ナイルの涙”これが本物かどうかわかりません。ちょっとした隙にすり替えられたこともあります。小里社長、これが本物かどうか、確かめてください」

「なに言っているのだ、外内君。昨夜から私たちはこの“ナイルの涙”を一分の隙もなく監視してきたのだよ。怪盗 韋駄天にすり替えられる隙など無かった。これは本物だよ」

ずっと監視し続けてきた警備陣を信用しないのかと、並木警部は外内探偵にちょっとした不満を持った。

「警部、最後の最後まで安心できません。小里社長、手にとって本物かどうか確かめてください。もし偽物だったらどうしますか？ 怪盗 韋駄天はそれほど遠くへ行ってない。非常線を張ってもまだ間に合います。さあ、調べてください」

外内探偵はあらためて“ナイルの涙”を調べるように言い張った。

大勢の警備陣の監視の下、警備会社の警備主任はレーザーセンサーのスイッチを切り、ダイヤルを合わせ、二つの鍵を解錠し防犯ケースを開けた。

開いた防犯ケースから、小里社長はずしりとした“ナイルの涙”を取りだした。

「別に異常はありません。確かにこれは“ナイルの涙”で間違いありません」

小里社長は胸をなで下ろしながら安心して言った。

「本物で間違いありませんか？ 私も宝石の鑑定に多少の心得があります。その“ナイルの涙”を見せてください」

外内探偵はポケットから宝石鑑定用のルーペを取りだして、小里社長が手に持っている“ナイルの涙”を奪い取った。

会場内にいた大勢の警備員達は固唾を呑んで、二人を見守った。

と、その時だった。バッシッと言う音がした途端電源が切れ、照明が落ち、会場内は一瞬のうちに暗闇に包まれた。

「おい、どうしたのだ？ 何があったのだ？ 早く照明を点けろ！」

大勢の警備陣がどよめき、並木警部の怒鳴り声が暗闇の中に響いた。

しかしなかなか照明は点かない。その中で用意のいい警備員は持っていた懐中電灯を点けた。かなりの光量があり“ナイルの涙”を納めていた防犯ケースの所にいた小里社長や警備会社の防犯主任、それに並木警部が光の中に狼狽えながら立っているのがわかる。

しかしそこに外内探偵はいなかった。外内探偵はどこに行ってしまったのだろうか？

並木警部は叫びながら辺りを見廻した。

「外内君！ どこに行ったのだ？ おい、外内君！」

並木警部は外内探偵を捜したが、彼はどこにもいなかった。“ナイルの涙”は外内探偵が手にしているはず。そのことに気が付いた小里社長はそこで初めて“ナイルの涙”が盗られたことに気がついた。

「あっ、“ナイルの涙”が、あいつに盗られたのだ。あいつが怪盗 韋駄天だったのだ。外内探偵が怪盗 韋駄天だったのだ！」

大切な宝石が盗まれたことを悟り、小里社長はとんでもないことになったと、その恐怖から体がガクガクと震えた。

「えっ、まさか、外内君が怪盗 韋駄天だったなんて、何かの間違いだよ」

外内探偵と何度も仕事をしたことのある並木警部は、未だに狐に化かされた感じで、何が何だかわからない様子であった。

ようやく照明が点き、末盛屋百貨店最上階の展示会場はパッと明るくなった。しかし大勢の警備員達の狼狽えた姿はまだ元に戻っていない。

その中、いち早く正気を取り戻したのは、やはり現場責任者である並木警部であった。

「くそっ！ 外内の奴が怪盗 韋駄天だったのか。あいつにはまんまと一杯食わされた！」

信じていた仲間に裏切られ、並木警部は怒りが沸々と込み上げてきた。

「おい、外内、外内探偵を探せ。奴が怪盗 韋駄天だったのだ。あいつが“ナイルの涙”を持っているのだ。早く外内を捕らえろ！」

並木警部の怒鳴り声でようやく我を取り戻した刑事、警備員達は外内探偵を捜しにその場から百貨店中へと散っていった。

並木警部は無線で外で待機していた三十名の警察隊を呼び、末盛屋百貨店の出入り口をすべて封鎖した。これで猫の子一匹でも出入りすることはできないはず。

外内探偵に変装した怪盗 韋駄天を、この末盛屋百貨店の中に閉じ込めることに成功したのだ。

しかし広い末盛屋百貨店の中、なかなか外内探偵の姿は見つからなかった。

「あいつはどこに隠れているのだ！」

並木警部たち警察、そして警備員は焦りが募っていった。

その時だった、外内探偵に扮した怪盗 韋駄天を発見したとの知らせが入ってきた。外内探偵に扮した怪盗 韋駄天は屋上にいたのだ。そして長いロープを下に垂らして、そのロープを伝って地上に降りようとしていたのだ。その準備をしていたところ、警備員に見つかったのだ。

怪盗 韋駄天は全身を黒づくめの、そして動きやすいようにピッタリとした服を身に纏っていた。頭にもすっぽりと真っ黒の目出し帽を被っている。これでは夜の闇に溶け込みははっきりとわからない。

真っ暗だった屋上はパッと照明が照らされ、真昼のように明るくなった。

「ようやく俺を見付けたな。しかし俺はお前みたいな間抜け奴に捕まるほどドジではない。“ナイルの涙”はいただいていくよ。ハ、ハ、ハッ」

ちらっと並木警部の方を見た怪盗 韋駄天は、そう言うと柵を乗り越えようとする。

「おい外内、いや、怪盗 韋駄天。とうとう見付けたぞ。お前を逮捕する。神妙にしろ」

並木警部は持っていたピストルを抜いて、銃口をロープを下ろし、柵を乗り越えようとしていた外内祐太郎に向けた。しかし彼の動きは止まらない。

「おい、動くな。動くと撃つぞ！」

並木警部は怒鳴っても、外内探偵は柵を乗り越えようとする動きを止めなかった。

その時だった、外内探偵を見付けた警備員が彼めがけて突進していく。そして柵から引きずり下ろした。外内探偵もただではすまない。二人は柵の下で殴り合いの乱闘をした。銃口を向けていた並木警部は困った。外内祐太郎に変装した怪盗 韋駄天を狙っても、これほど暴れたら照準が定まらない。下手に警備員に当たったら大変なことになる。

警部は銃口を下げ、警備員を助けようと乱闘する二人に近づいた。

乱闘の勝負は呆気なく終わった。怪盗 韋駄天の変装した外内祐太郎が勝ったのだ。外内探偵は柵を乗り越えると、下に垂らしたロープを伝ってあっという間に隣の低いビルの屋根に下りてしまった。

それを見た並木警部の動きは止まり、無線機を手にして、地上の警察隊に連絡をした。

「外内が逃げたぞ！ 外内がロープを伝って、隣の低いビルの屋上に下りたぞ。全員、隣のビルを囲め！ 早く外内を捕まえろ」

無線で連絡をすると、先ほどの乱闘で打ちのめされた制服姿の警備員に駆け寄った。

3 もう一人の外内探偵

「おい、君、大丈夫か？」

「大丈夫です・・・いててて、かなり痛みます・・・でも、なんとか“ナイルの涙”は取り返すことができました。これで面目躍如ですね・・・並木警部」

乱闘のダメージが大きいのか、消え入りそうな声で、ようやく話すことが出来た。

“ナイルの涙”を取り返した。その言葉を聞き並木警部はぎょっとした。

警備員の帽子が飛ばされていた。よく見るとその警備員は見知った顔。それはまさしく外内祐太郎ではないか。

「き、君は、外内・・・君・・・じゃないか・・・」

「警部、奴は僕に変装をしていたんですよ。僕の振りをして“ナイルの涙”を盗んだのですよ。でも安心してください。“ナイルの涙”は僕がちゃんと取り返しました」

そうして外内探偵は“ナイルの涙”が入っているビロードでできた黒色の巾着袋を並木警部に手渡した。警部は巾着袋の中を調べた。そこには確かに大粒のダイヤモンド“ナイルの涙”が収まっていた。この外内探偵が怪盗 韋駄天から取り返したのだ。

そのうち下から階段を使って大勢の刑事、警備員が屋上へ上ってきた。その中には千歳堂の小里社長や峯田専務もいた。

警備員達は乱闘で倒れている警備員、つまり外内探偵と、それを介抱している並木警部の所に駆け寄り、二人を取り囲んだ。

「あっ、こいつは外内だ。警部、外内を捕らえたのですね。お手柄です！」

刑事の一人が、並木警部が外内祐太郎と捕まえたと思い、大声で叫んだ。

「いや、これは本物の外内君だ。怪盗 韋駄天は外内君に変装していたのだ。しかし外内君は警備員に変装してこの“ナイルの涙”を守ってくれた。小里社長、“ナイルの涙”は外内君が取り返してくれたのです。これが本物かどうか、よく見てください」

そう言って並木警部は外内探偵から受け取った“ナイルの涙”の入った巾着袋を小里社長に手渡した。小里社長は中を見て大粒のダイヤモンドが入っている事を確認した。

「警部・・・こ、これは・・・」

小里社長は未だに信じられないような顔つきだった。

「この外内探偵が取り返してくれたのです。彼は本物の外内探偵です。この“ナイルの涙”が本物かどうか、確認してください」

並木警部は念を押して外内探偵が本物であり、“ナイルの涙”を取り返してくれたことを、取り囲んでいる刑事や警備員に告げた。

小里社長はポケットから宝石鑑定用のルーペを取りだして、“ナイルの涙”を光に当てて、ルーペを覗き込んでじっくりと鑑定をした。

「た、確かにこれは“ナイルの涙”です。ああ、戻ってきたのだ。有難うございます。これが奪われたら、私は破産でした。ああ、助かった、外内探偵。あ、有難うございます」

小里社長は深々と、この“ナイルの涙”を取り返してくれた外内探偵に何度も何度も頭を下げて、

お礼をした。

「いや、すまなかった。外内君、君を怪盗 韋駄天だ疑ってしまった。許してくれ」

並木警部は少しでも外内探偵を疑ったことを面目なく詫びた。

「いや、いいのです。あれだけ完璧な変装をしたら、誰でも間違いをします。しかし警部。どうやらこの中に、怪盗 韋駄天の仲間がいるようですね・・・」

「えっ、この中に怪盗 韋駄天の仲間がいるって。でも警備員はすべて素性の知れたものを選んでいないはず。ねえ、そうだろう？」

並木警部は警備会社の警備主任に向かっていった。

「ええ、私どもの会社では、今度の警備に対して厳重に人選をしています。私どもの中から、犯罪に手を染める者なんているはずはありません！」

自分たちの警備会社を疑われたと思った警備会社の警備主任は怒りながら言った。

「ははは、気を悪くしたらすみません。でもあの時どうして照明が消えたのでしょうか。確かに防犯ケースの横に僕に扮した怪盗 韋駄天がいたのですよ。それは皆確認しているはずですよ。それなら誰か他の人物が照明のスイッチを切ったのです。それが怪盗 韋駄天の協力者だと言うことです。あの時、あの場所にいなかった人物です。誰だかわかりますか？」

外内探偵の指摘に、そこにいた刑事や警備員たちはお互いに顔を見合わせ、この中に怪盗 韋駄天の仲間がいるのではないかと、お互いに疑心暗鬼になっている。

「ハハハ、まだわかりませんか？ あの時あの場所にいなかった人物を・・・。峯田さん、あなたあの時いませんでしたよね。当然でしょう、照明を切りに電源盤の所にいたのですからね。そうです、あなたが怪盗 韋駄天の協力者なのです」

外内探偵は峯田専務を指さした。

「私が怪盗 韋駄天の協力者だって。滅相もない、変な言いがかりはよしてくれ」

峯田専務は否定するが、額から汗を流し、明らかに狼狽えている。

「峯田さん、あなた、僕の事務所を訪れたことは一度もなかった。当然でしょう、僕の事務所ではなく、僕に変装した怪盗 韋駄天を直接呼んだのですからね」

小里社長は一瞬ハッとした。外内探偵は峯田専務が千歳堂の本店に連れて来たのだ。別に外内探偵の事務所に行ったわけではないのだ。彼が連れて来たのは外内探偵に変装した怪盗 韋駄天だったのだ。

「おい、峯田、どういうことだ。お前が、お前が怪盗 韋駄天の仲間なのか？」

雇い主の千歳堂の小里社長がいまだに信じられない様子で言った。この峯田専務は千歳堂の屋台骨を支えている人物であり、小里社長はこの峯田専務を信頼し、頼り切っていたからだ。

「ええ、そうですよ。私が怪盗 韋駄天を手引きしたのですよ・・・」

先ほどまで狼狽していた峯田専務であったが、彼が怪盗 韋駄天の協力者であることを俄に信じられない様子的小里社長の表情を見て、開き直ったかのように言い放った。

「ど、どうしてなんだ。どうして怪盗 韋駄天の協力者に成り下がったのだ！」

小里社長は、信頼していた峯田専務がどうして怪盗 韋駄天に力を貸したのか、理解に苦しみ、峯田専務に詰め寄った。

「フン、あんたにはわかるまい。あんたは生まれながらに千歳堂の跡継ぎだからな。何も苦労もせず、親爺から店の信頼と莫大な遺産を受け継ぎ、のうのうと暮らしていやがる。綺麗な嫁さんをもらい、高級住宅地に豪勢な屋敷を構え、高級外車を乗り回していやがるそれが気に入らないんだよ。俺はな、父親が経営していた宝石店が潰れて、莫大な借金を背負わされた。毎月の稼ぎは借金の返済に消えていった。貧乏をしたよ、学校もろくに行かしてもらえず、生活費を稼ぐために働いた。そしてあんたの親爺の店、千歳堂に入った。あんたの親爺は厳しいがいい人だ、俺も尊敬しているよ。仕事を一から叩き込まれたよ、それで今の俺がいるから、あんたの親爺には頭があがらないよ。しかしその息子は別だ。さっきも言ったようにあんたは親爺の遺産にしがみついたのうのうと生きてきた。仕事をどれほど覚えたというのだ？ 仕事なんか身が入らず、金に飽かして錦（名古屋の繁華街です）で呑み歩いていやがった。親爺が死に俺がいなかったら、あんただけでは千歳堂はもたなかった。俺はあんたの顔を見ると無性に腹が立つんだよ。だから“ナイルの涙”を手に入れたとき、あんたにぎゃふんと言わそうと、怪盗 韋駄天にこの話を持ちかけたんだ。“ナイルの涙”を買うのに銀行に莫大な借金をさせた。それが奪われあんたの顔が真っ青になるところが見たかったんだよ。“ナイルの涙”が奪われたらあんたは破滅だ。今までみたいなのうのうと生きてはいけない、あんたが落ちぶれていくその姿が見たかったんだよ」

峯田専務は今まで胸の内に秘めていた、雇い主である小里社長に対する不満を、これぞと言わんばかりに吐き出した。

「お、お前、そんな気持ちで働いていたのか。おい、お前はなんていう奴だ。警部さん、こいつをさっさと刑務所に入れてください。こいつの顔なんか見たくない」

売り言葉に買い言葉で、小里社長は峯田専務に罵詈雑言を吐いた。

「それじゃあ、峯田さん。署で詳しく話を伺いますので、連行します。いいですか」

並木警部は峯田専務に手錠をかけると、部下の私服刑事二人を付けて下に止めてあるパトカーで中警察署に連行させた。

並木警部には大仕事が待っていた。ロープを伝い地上に降りていった怪盗 韋駄天を掴まえることである。彼は残りの部下を連れてエレベーターで地上に降りていった。外内探偵も私服刑事達のあとに続いた。

末盛屋百貨店の最上階の展示場には千歳堂の小里社長と末盛屋の守岡社長が残った。時間が経ち怒りが収まった小里社長はすっかり力を落とし、落胆していた。信頼していた峯田専務に裏切られたから無理もない。

「小里君、君の気持ちは良くわかるよ。信頼していた人物に裏切られることほどショックなことはないからね。私もそんな経験があったよ」

すっかりしょげている小里社長に話しかけた。

「確かに今までの君の経営者としての態度は芳しいものとは言えなかった。多くを峯田君に頼っていただろう。その峯田君に裏切られたのだ。君が落胆するのも無理はない。しかしこれからを考えろ、今の君では誰も付いて来はしないよ。気が付いたら裸の王様だったんだよ。まあ済んだことはしかたがない、これから頑張ればいいんだよ。これから部下に信頼されるように頑張ればいいじゃないか」

「有難うございます、守岡さん。もう一度頑張ります」

守岡社長の言葉に、小里社長は少し光が見えた気がした。

4 大捕物

地上では大捕物が行われていた。ロープを伝い軽業師のように末盛屋百貨店の最上階から下りてきた怪盗 韋駄天は隣の三階建てのビルの屋上に降り立つと、さらに隣の民家の屋根に飛び移り、そして屋根づたいにピョンピョンピョンと次々と移っていった。

屋上の並木警部から連絡を受けた地上の警察隊は、百貨店から外に出て、道路から大型の懐中電灯を照らして、三階建てのビルから次々屋根伝いに飛び移る、怪盗 韋駄天を追いかけた。

「おい、怪盗 韋駄天がそちらに行ったぞ。追いかける」

しかし警察隊は屋根をぴょんぴょん飛び移る怪盗 韋駄天を下で追いかけて右往左往するだけで、何もできなかった。

「おい、何をやっているのだ！」

ちょうど下りてきた並木警部が、警官隊のふがいなさを見て大声で怒鳴った。

「誰かはしごを持ってこい。はしごで屋根の上に登れよ！」

「しかし、屋根までかかるような長いはしごがありません。いま消防車を呼んでいるところです。少し時間がかかると思います」

「そんなことをしていたら、怪盗 韋駄天に逃げられてしまうぞ。どこかで借りてこい！」

警官隊の一人がどこからか長ばしごを持ってきて、屋根の軒にかけた。そして数人の警官がはしごを登って屋根の上に出た。

住民や歩行者が何が起こったのかと、屋根の上を見上げた。

黒い服を着た男が、屋根をぴょんぴょんとすばしっこく飛び移っている。

「あっ、あれは何だ。人が屋根を飛び移っているぞ」

一人が飛び移っている人を指をさして言った。

「あれは、怪盗 韋駄天じゃないのか？」

「そうだ、あれは怪盗 韋駄天だよ」

「韋駄天みたいにすばしっこく、屋根を飛び跳ねているぞ。あれじゃあ、警察も捕まえないな」

ようやく屋根に登り、のっそのっそと屋根を慎重に、というよりもようやく歩き始めた赤ちゃんのように歩む警官隊を馬鹿にしたような言いぐさだ。

無理もない、そこは高さ七、八メートルもある屋根の上だ。足でも滑らせて屋根から落ちれば、大怪我は免れない。打ち所が悪ければ死んでしまう。警官隊が慎重に歩むのも当然だ。

「怪盗 韋駄天は末盛屋で何か盗んだのだろうね」

「あれじゃないのか・・・ほら、宝飾品展で展示されている大きなダイヤモンド。えーと、なんて言ったのかな？」

「あれだよ、たしか“ナイルの涙”三十カラットもある大粒のダイヤモンド。九億とも十億とも言われる高価な物らしいよ」

「そんなに高価な物なのか？ 警察があれだけ頼りなかったら逃げられてしまうぞ。金額が金額だけに首が幾つも飛んでしまうかも知れないな」

見上げている見物人は、警察隊のふがいなさを揶揄している。

事実、並木警部にハッパをかけられて警官隊が屋根に登ったのはいいが、やはり慣れない場所だけに足下が覚束ない。相手はぴょんぴょん屋根を飛び跳ねてあっという間に家並みの中程まで移動している。これでは警官隊が掴まえるのは無理だろうと、誰から見てもそう思える。

「おい、反対からからもはしごをかけて登って、挟み撃ちにしろ」

並木警部のかけ声で、反対側に回った警官隊も、屋根にはしごをかけて登り初め、そして挟み撃ちにしようとした。

いくら軽業師のごとく屋根の上をぴょんぴょん跳びはねる怪盗 韋駄天でも向かう先から警官隊が迫ってきたら堪らない。一瞬、怪盗 韋駄天は立ち止まった。追っ手も少しずつではあるが迫ってくる。

「よしもう少しだ、もう少しで挟み撃ちにできるぞ」

赤ちゃんのような覚束ない足取りの警官隊だが、両側からじわりじわりと迫ってくる。

これではさすがの怪盗 韋駄天も絶対絶命だ。

「怪盗 韋駄天め、神妙にしろ。逮捕する」

両側の警官隊は目前に迫ってきた。屋根から落ちることのない地上ならば、飛びかかって押さえ込んでいくほどの近さまで迫ってくる。

「もう一息だ、早く取り押さえろ！」

もう一歩で怪盗 韋駄天を逮捕できる。と、その時だった。怪盗 韋駄天は意外な行動に出た。それは誰が見ても驚く行動だった。

「あっ、怪盗 韋駄天が飛び降りたぞ。大丈夫か？」

何と、怪盗 韋駄天は高い屋根の上から飛び降りたのである。それには挟み撃ちにしようとした警官隊も、地上から見守っている警官隊、警備員、そして野次馬の人たちも驚いた。一番驚いたのは下から指示を出していた並木警部だったろう。

これほどの高さから落ちたら大怪我で済めばいい方だ。

しかし怪盗 韋駄天が落ちたところはゴミ袋がうずたかく積まれていたゴミ置き場だった。怪盗 韋駄天はゴミの山の中に埋もれていた。

「ゴミ置き場の中に落ちたぞ。それ、捕ましろ！」

並木警部のかけ声とともに警官隊がゴミ置き場に突進していった。

そして一人の黒づくめの服を着た男をゴミの山から捜し出し捕まえた。幸いにも怪我一つしていない。ゴミの山がクッションとなり怪我をしなかったのだろう。ある意味でそこに落ちたのは計算ずくだったかもしれない。しかし計算外だったのは、警官隊がすぐに落ちた怪盗 韋駄天を取り押さえたとはいえないのか。

「怪盗 韋駄天を捕まえたぞ！ 神妙にしろ、怪盗 韋駄天！」

あれほど逃げまくった怪盗 韋駄天はさほどの抵抗もなく、難なく警官隊に囚われた。怪盗 韋駄天は並木警部の前で、おとなしく胡座をかいて座り込んでいる。

「とうとう、観念したな。怪盗 韋駄天め！」

顔をすっぱり覆っていた覆面を剥ぎ取ろうとする。その下には外内探偵に変装した怪盗 韋駄

天がいるはず。外内祐太郎の顔があるはずであった。

しかし覆面の下の顔は全くの別人だった。と言うことはこの顔が怪盗 韋駄天の本当の顔と言うことか？ でもまだ他の顔に変装しているかも知れない。

「お前が怪盗 韋駄天か。いつの間に変装を解いたんだ。それともまた別人に変装しているかも知れないぞ。なんと言っても怪盗 韋駄天は変装の名人だからな」

並木警部は男の面の皮を力強く引っ張った。

「いててて、止めてくれよ。俺はその何とやらじゃないよ・・・」

先ほどから異様な匂いがしているなと思った。最初はゴミの匂いかと思ったが、そうではないようだ。男が吐く息は酒臭かったのだ。

「俺は頼まれただけだよ。酒を吞ませてくれるからやっただけだよ・・・」

男を連行しようとするが、男の足取りは覚束ない。まるで酔っぱらいのようだ。屋根の上の韋駄天のような動きは全く感じるできない。

「こいつ、演技をしているのか？ 往生際の悪い奴だ」

並木警部はこの男が怪盗 韋駄天なのか、それとも単なる酔っぱらいなのか、判断できないでいた。

「警部、こんな所にマンホールの蓋が開いています。ひょっとしたらここから逃げたのかも知れません」

怪盗 韋駄天が落ちたゴミ置き場の下を調べていた警官の一人が、ゴミ置き場の下のマンホールの蓋が開いていると報告した。

その報告に驚いた警部は、ゴミ置き場の下を確かめた。

「本当か？ こいつが怪盗 韋駄天じゃなかったら、ここから逃げたと言うことが？」

警部の顔はみるみるうちに蒼白になっていく。せっかく捕まえたと思った怪盗 韋駄天が全くの別人になるのだ。メンツが丸潰れになるからだ。

並木警部はマンホールの中を調べさせた。しかしそこにはもう誰もいなかった。

マンホールは下水道に繋がっていた。底に横穴が掘られ、下水が流れている。怪盗 韋駄天はその下水を歩いていったのだろう。何としても怪盗 韋駄天を捕らえたい並木警部は、警官隊を下水道に送り込み、自らも警官隊の後を追った。

しかし結局怪盗 韋駄天は見つからなかった。警察の失態であった。

ゴミ置き場で見つかった男も、警察署で詳しく調べたが、単なる酔っぱらいに過ぎなかった。彼が言うように酒を飲ませてやるからと、全身黒ずくめの恰好にさせられて、ゴミ置き場で待機していたところ、上からなにか大きいものが落ちてきて、その後警官隊が大勢押しかけてきて捕まったのだった。

どうやら怪盗 韋駄天とは全く無関係で、こちらの方面からも怪盗 韋駄天を追うことはできなかった。

「まあ、そんなに落胆しなくてもいいじゃないですか。“ナイルの涙”が助かっただけでも大収穫ですよ。もし“ナイルの涙”が盗られていたら、それこそ大失態、警察は物笑いの種ですよ。これでよしとしましょうよ」

怪盗 韋駄天を取り逃して落胆する並木警部を、外内探偵は慰めの声をかけた。
外内探偵は怪盗 韋駄天から“ナイルの涙”を高い評価を得ることができた。
もちろん“ナイルの涙”を所有する千歳堂の小里社長から大変感謝されたことは言うまでもない。

5 再び予告状

栄の末盛屋本店で“ナイルの涙”を巡る大争奪戦があった日から二日後、千歳堂社長の小里育真氏の一人娘、瑠璃子さんのお見合いが、伏見のホテルで行われていた。

美人で誉れ高い瑠璃子さんは引く手あまた。いろいろなところから条件のいいお見合い話が持ち込まれた。もちろん千歳堂の一人娘だから、最低限の条件が、婿養子になってくれること。だから良家の次男、三男からのお見合い話が多い。

その日のお見合いも、地元の大きな銀行の頭取の次男であった。このお見合いは父親の小里氏が大乘きりだ。金融機関に大きなコネクションができれば、資金面で千歳堂を大きくするのに都合がいいからだ。相手の人もこのお見合いには大乘り切りのようだ。

しかし瑠璃子さんはこのお見合いには乗り気ではなかった。

相手の男性は瑠璃子さんよりも六歳年上の二十七歳。有名大学を卒業後、大手都市銀行に勤めている。スポーツ万能、お見合い写真を見たのだが身長は百八十センチもありなかなかの二枚目である。つまり、誰が見ても非の打ち所のない人物であった。

それなのにどうして瑠璃子さんはお見合いに乗り気ではないのだろうか？

そのことについて、先日、つまり怪盗 韋駄天から予告状が届いた日のことであるが、父親である小里社長に相談に行ったのだが、予告状の件でバタバタしてしまい、相談には乗ってもらえなかった。

そして翌日の末盛屋での“ナイルの涙”を巡る争奪戦があり、自宅には全く帰ってこなかった。そしてさらなるショックなことが小里社長を襲う。それが信頼していた峯田専務の裏切りである。峯田専務が怪盗 韋駄天に協力者であったという事実が、小里社長をさらに落胆させた。

(あの優しい峯田のおじ様が、怪盗 韋駄天の協力者だったなんて・・・)

このことは峯田専務と家族ぐるみの付き合いをしていた、小里家全員に深い影を投げ落とすこととなった。

(お父様は峯田のおじ様をとて信頼していたのに、峯田のおじ様に裏切られるなんて、お父様が気を落とされるのも無理はないわよね・・・)

あの事件以来、小里社長の落胆ぶりは見るに見れないほどであった。落胆する父の姿を気の毒に思い、自分の意志を父に告げることができなかった。そしてとうとう、お見合いの日を迎えることとなったのだった。

彼女が小里社長に相談したかったことは、大学を出てどこか小さな会社でもいいからお勤めに出たい。そして社会勉強をしたいということであった。

瑠璃子さんは名古屋でも有名なお嬢様学校に、幼稚園から小学校、中学、高校、そして大学へとエスカレーター式に進学してきた。

そして現在大学の四年生。周りの友達も皆、就活で忙しい。しかし瑠璃子さんは大学を出たら誰か良家の子息と結婚して、家庭に収まって欲しいというのが、父親である小里社長の希望だった。

そして今日、お見合いする相手は、地元の銀行の経営者の子息。小里社長にとっては願っても

ない相手だった。銀行家と縁戚関係になれば、有利に融資が受けられるから、事業を広げたい小里社長は今度のお見合いはぜひ進めたかったはずだ。

お見合いの相手はの名前は鈴木章二という。周りが薦めるだけあり申し分のない男性である。瑠璃子さんが、「はい」と言えばトントン拍子で結婚の話は進んでいくだろう。

「どうだ、鈴木君は。なかなかいい男だろう。中日本銀行の頭取の息子さんで、いまは大手都市銀行の一橋銀行に勤めている有能な人物だ。鈴木君もお前を気に入ってくれている。お前と結婚したら、将来は千歳堂をしょって立つ人物になってくれるだろう。どうだ、この話を進めるぞ」

「お父様、ちょっと待って下さい。暫く考えさせて下さい・・・」

「暫く待ってくれとは、どれぐらい待てばいいんだ。鈴木君も家柄も学歴も勤め先も申し分ない。他からも色々と話があるようだ。ぼやぼやしていたら、他の話に乗ってしまうぞ。とにかく二、三日中に決めなさい。いいね」

そう言うとき小里社長は池下の自宅から千歳堂に向かった。小里家は千種区の池下にあった。小里社長の父が建てた自宅は築五十年と、少々古いが、敷地面積は三百坪はある。この辺りでは有数の豪邸だった。

あの事件以来、小里社長は神経的にまいっていた。確かに“ナイルの涙”は奪われることはなかったが、信頼していた峯田専務に裏切られたことが最大の原因だ。それだけに、今度の瑠璃子さんのお見合いに大のりきりの小里社長を見ると、父の望みを叶えたかった。

小里社長は鈴木章二を大きくかっていた。彼を娘婿にして将来の後継者にしたかったのだろう。この話になると、小里社長の表情は明るくなった。

しかし瑠璃子さんはまだ迷っていた。

（それがお父様の望みだから仕方がない。章二さんも真面目そうで感じのいい人・・・もし、彼と結婚したら、私を大切にしてくれるでしょう・・・）

小里社長の望み通り、大学を卒業したら、鈴木章二との結婚に傾きかける。

しかしその一方で、その反対の思いも頭を過ぎる。

（やっぱり、大学を卒業したら、お勤めに出たい。そしていろいろな人と出会い、いろいろな経験をしてみたい・・・お父様には申し訳ないけれど、やっぱり就職してみたい）

二つの思いが頭を駆け巡り、その夜はなかなか眠りに就けなかった。

そして眠れぬまま、朝を迎えることになっていた。

朝が来て、小里家は再び恐怖に包まれることになる。

怪盗 韋駄天から再び予告状が届いたのだ。予告状を収めた封筒には、消印が押されていないかった。恐らく昨夜から今日の未明にかけて、何物かに小里家のポストに投函されていたようだ。

朝一番に起きた住み込みのお手伝いの中野加代子さんが新聞を取りにポストを開けたとき、消印のない不審な封筒を発見したのだ。その封筒には“千歳堂社長、小里育真殿”と書かれている。しかし前回は直接千歳堂本店に送られてきたので、この小里家の人にはそれがそれほど不審なものとは思わなかったようだ。

加代子さんは新聞と一緒にその封筒を、朝食を食べに食堂に来た小里社長に見せた。

「旦那様、こんなものが新聞と一緒にポストに投函されていました・・・」

「何だろう？ 送り主の名前が書いていない。消印もないな・・・」

小里社長は不審に思いながら、前回のことを思い出し、慎重に封筒を開けた。

封筒の中には一枚の便箋が。小里社長は便箋を広げて呼んだ。

「先日はいらぬ邪魔が入り“ナイルの涙”を戴き損なった。恐らく金庫の奥深くにしまい込み、二度と展示会に出品しないだろう。だから私はあなたのもう一つの宝物、瑠璃子嬢をもいただきに参上する」

その文面を読んで、小里社長はぶるぶると体が震えた。そして顔が蒼白となる。

“ナイルの涙”を盗むのに失敗した怪盗 韋駄天は、今度は一人娘の瑠璃子さんを狙っているのだ。

「旦那様・・・どうかなされましたか？」

小里社長の顔色が悪くなったことに気が付いた加代子さんは、心配そうに言った。

「瑠璃子には、今日一日、家にいるように伝えてくれ。大学は休むように」

「はあ・・・わかりましたが・・・」

加代子さんはどうしてそんなことを言うのかわからず、怪訝な目で小里社長を見ていた。

それから小里社長は何も言わず、黙って書斎に引きこもった。そして書斎に据え付けられている電話で、“ナイルの涙”を守ってくれた外内探偵の事務所に電話した。

「ああ、外内さん。千歳堂の小里です。先日は“ナイルの涙を”を守っていただいて、有難うございました」

「いや、礼には及びません。ぼくの仕事は怪盗 韋駄天からお宝を守ること。ただ仕事をしただけです。それで小里社長、今日は何のご用件ですか？」

「それが、あの。怪盗 韋駄天からまた予告状が届いたのです・・・」

小里社長は不安そうに小さな声で話した。

「えっ、怪盗 韋駄天からまた予告状が届いたのですか？ それでまた“ナイルの涙”を盗もうとしているのですか？」

「いや、それが、“ナイルの涙”は諦めたようで・・・それで今度は、娘の瑠璃子を狙うとか、予告状に書かれているのです」

「瑠璃子さんというと、事件の前に千歳堂でお会いした、あの綺麗なお嬢さんですか。それで怪盗 韋駄天は今度はお嬢さんを盗もうとしているのですか。これは盗むのではなくて誘拐するということですね。小里さん、これからすぐにお宅に向かいます。確かお宅は池下でしたね。四十分ぐらいで伺えると思います。瑠璃子さんには絶対に外に出さないで下さい」

「ええ、瑠璃子には家から出ないように言っております。それではお待ちしております」

それからきっかり四十分後に外内探偵は池下の小里邸に到着した。しかし一人ではなかった。どうやら同業者を連れているらしい。

外内探偵が来たことで、小里社長はホッと安心した顔になった。それだけ“ナイルの涙”を守ってくれた外内探偵に信頼を寄せているのだ。その外内探偵が誰か人を連れて来ているのを不審に思った。

「あっ、外内さん、お待ちしております。あの、そちらの方は・・・？」

「小里さん、実は僕、明日から五日間ほど出張に行かなければなりません。それで同業者の仲田

さんを連れてまいりました。仲田さんは優秀な探偵で、この道二十年のベテランで、信頼のできる人です」

「私立探偵の仲田和彦といいます。何でもお言いつけ下さい」

仲田探偵は、小里社長に名刺を渡す。小里社長は仲田探偵を信頼できる人物か確かめるように見る。仲田探偵は小柄な外内探偵と違い、身長百八十センチ以上はあるような、がっしりとした体格であり、腕力では外内探偵よりも遙かにありそうで頼もしそうだった。

しかし問題は、この男が怪盗 韋駄天から、一人娘の瑠璃子を守ってくれるかにつきる。外内探偵は見事に“ナイルの涙”を守ってくれたから、小里社長も絶大な信頼を寄せて、新たな脅迫状が寄せられたときに、真っ先に連絡をした。その外内探偵が、仲田探偵を信頼に足りうる人物と評しているから、その言葉を信じるしかなかった。

「お嬢様はこの家にいますでしょうね」

「ええ、大学は休めとってあります。呼んできましようか？」

「いや、まだいいでしょう」

小里社長は二人の探偵を自宅の応接室に入れた。お手伝いの加代子さんが、二人のお客さんにお茶を出そうと応接室に入ってきたが、小里社長は「入らなくてもいい」と、無下に追い返した。加代子さんは小里社長から殺気が漂っているのを感じ、何か大変なことになっていると直感した。

小里社長は、新しく送られてきた予告状を、外内探偵に見せた。

「ふんふん・・・と言うことは怪盗 韋駄天は“ナイルの涙”を諦めて、今度は新たに瑠璃子さんを狙うということですか。ところで“ナイルの涙”は今、どこにあるのですか？」

「“ナイルの涙”は中日本銀行の貸金庫に入れてあります」

「銀行の貸金庫ですか・・・と言うことは警備は厳重ですな。怪盗 韋駄天も容易に手は出せないでしょう」

「ええ、あの事件があってから、“ナイルの涙”は警備の厳重な銀行の貸金庫の方が安全だと思ひまして、保管してもらうことにしました」

「しかし怪盗 韋駄天が、そう易々と諦めるとは思えない。あいつは狙ったものは必ず盗み出すと豪語してます。奴の面子にかけてもまた盗み出すかも知れません」

そう聞かされると、小里社長の表情は曇った。

「瑠璃子さんを誘拐して、“ナイルの涙”との交換を持ちかける・・・こういうことが考えられます」

そう聞かされ、小里社長はハッとした。

「それじゃあ、怪盗 韋駄天はまだ“ナイルの涙”を諦めていないということですか。瑠璃子を誘拐してその交換を迫ろうと言うのですか？」

「恐らくそう考えるのが妥当でしょう。確かに瑠璃子さんは美しいお嬢さんだ。怪盗 韋駄天が瑠璃子さんに一目惚れをして誘拐をする・・・しかし瑠璃子さんは生身の人間です、怪盗 韋駄天が瑠璃子さんに一目惚れをして盗み出したとして、瑠璃子さんの心まで盗むわけにはいきません。それに小里社長を苦しめる敵に、賢明な瑠璃子さんが心を奪われる訳はありません。それ

なら動物園の動物のようにどこかに閉じ込め自分の物にしようとするかも知れませんが、僕が思うには怪盗 韋駄天はそんなに残酷な男ではありません。それなら瑠璃子さんを誘拐して“ナイルの涙”と交換する。そう考えるのが普通だと思います。大事な一人娘なら、小里社長は要求に呑むと踏んでいるのです」

「そうですか・・・」

小里社長の表情はさらに深刻になっていく。

「ところで“ナイルの涙”は中日本銀行の貸金庫に預けてあると仰いましたが、お嬢さんのお見合い相手は、中日本銀行の頭取のご次男さんでしたね・・・」

「ええ、鈴木章二君といい、文武両道のなかなかの好青年です。今は一橋銀行に勤めている将来有望な人材で、千歳堂を任せるに相応しい人物だと思っています。中日本銀行は千歳堂の取引銀行で、その関係で鈴木さんとは親しくさせていただいています」

「そうですか。中日本銀行の頭取の鈴木義治氏の次男なら家柄といい申し分のない人物です。しかし最近中日本銀行には黒い噂が絶えません。表沙汰にはなっていませんが裏社会への不正融資の噂があります。銀行も信頼が第一の堅い商売ですが、扱っているものがものですから、いろいろな人たちとの交際しなければなりません。正直言ってきれい事だけでは成り立たない商売です」

外内探偵は銀行を非難するような物言いであった。

「そうですか、いや、それは初耳です。鈴木さんとは古い付き合いで、温厚な紳士ですが、そのような人たちとの付き合いがあるようには思えません」

俄に信じられないという表情である。

「確かにそうかも知れませんが、しかし頭取が紳士だからといって、下のものまでがそうとは言えません。中日本銀行は頭取派と副頭取派の二つの派閥があるのはご存じですね。副頭取の山浦さんは頭取に非常に対抗心をお持ちのようで、業績を伸ばすために闇世界との取引に脚を突っ込んでいます。企業人というものはいろいろな面を持っているようです。そのことについてはこの仲田さんの方が詳しいです。仲田さんは法律事務所の依頼で、いろいろな企業の内情を調査しています。ねえ、仲田さん」

今まで二人の話をじっと聞いていた仲田探偵に聞いてみた。

「ええ、法律事務所の依頼で企業の内情を調査していますが、企業の裏の顔が見えてきます。確かに中日本銀行に関しては、最近余りよくない噂が流れています・・・」

「うーん・・・」

小里社長は唸り考え込んでいた。

「銀行とはそういうものですよ。堅い仕事だけれど、いろいろな人物と付き合いなければなりません。鈴木頭取の息子さん・・・、確か大手都市銀行の一橋銀行にお勤めのようなですね。一橋銀行も危ない融資をすることで有名です。そうだ、一度仲田さんに詳しく調査してもらったらどうですかね。人間なんて裏表があるものです。特にエリートと呼ばれる人種は裏の面もあるようです。なに二、三日あればわかることです」

「そうですか・・・章二君の調査、お願いしましょう」

「そう言えば瑠璃子さんですが、近々何かご予定はありませんか？」

「ああ、そう言えば今度の日曜日に長久手で開かれるチャリティーコンサートに出るとかでピアノの練習をしていた・・・」

「もちろんそれは取りやめにしてください。大勢人が集まる所では警備は難しいです。怪盗 韋駄天には恰好の状況を与えることになります」

外内探偵は強く言った。

「わかりました、娘にはそう伝えておきます」

「このことはお嬢さんには私から伝えましょう。瑠璃子さんをお呼びしてきてください」

外内探偵が言うと、小里社長は加代子さんをお呼びして、瑠璃子さんをお呼びするように命じた。

「すまないが、瑠璃子をお呼びしてきてくれ」

暫くして瑠璃子さんが二階から下りてきて、応接室のドアをノックした。

「お父様、瑠璃子です」

「ああ、瑠璃子か。入ってくれ」

瑠璃子がドアを開けると、ソファには父親が二人の男とテーブルを挟んで向き合って座っているのが目に入ってきた。一人は数日前に千歳堂で見かけた人物、確か外内探偵とかいった私立探偵。もう一人は初めて見る男である。

どうして外内探偵がこの家にいるのか、理解に苦しんだ。前の時は怪盗 韋駄天が父の大切な“ナイルの涙”を盗むという予告状が千歳堂に届いたことで、峯田のおじ様が呼んだ私立探偵だ。

ひょっとしたらまた“ナイルの涙”を盗み出そうとしているのではないか・・・。

そのことが瑠璃子さんの頭を過ぎった。

「瑠璃子、ここに座ってくれ。こちらは外内探偵。先日千歳堂で会っただろう。大切な“ナイルの涙”を怪盗 韋駄天から守ってくれた凄腕の私立探偵だ。私も外内探偵には感謝してもしきれないほどだ。そしてこちらが外内探偵とは同業の仲田探偵だ。この道二十年のベテラン探偵だぞうだ」

小里社長は二人の探偵を瑠璃子さんに紹介した。

「それでどうして今日、お二人に来てくれたかという、実は今朝、怪盗 韋駄天からこのような予告状が届いたのだよ」

小里社長は今朝届いた、怪盗 韋駄天からの予告状をテーブルの上に置いた。

「お嬢さん、怪盗 韋駄天は今度はお嬢さんを狙っているのです。僕が考えるには、怪盗 韋駄天はまだ“ナイルの涙”を諦めず、お嬢さんを誘拐して、“ナイルの涙”と交換取引を要求してくるかも知れません」

「か、怪盗 韋駄天が、私を誘拐しようとするのですか・・・？」

瑠璃子さんは目をカッと見開き、驚いた表情で外内探偵を見つめた。

「ああ、だから今日は大学に行かせず、家でじっとしとれとと言った」

小里社長が言うと、次に外内探偵が続けて言った。

「この予告状には、いつ決行するかという日付が書いてありません。それで小里社長に聞いたのですが、お嬢さんは、今度の日曜日、長久手でチャリティーコンサートがあるようですね。ああいったコンサートには不特定多数の人物が出入りします。それだけ警備も難しい。怪盗 韋駄天が会場に容易に入り込むことができます。僕の考えでは、怪盗 韋駄天は恐らくその日を狙ってくると思います。それで、そのコンサートに出るのは止めてもらいたいのです」

「そ、そんな・・・駄目です。私はチャリティーコンサートのためにずっと頑張ってきました。それを出てはいけないなんて、あんまりです。それに私が出るのを楽しみにしている人たちもいます。その人達のためにも私はコンサートに出たいのです」

「なあ瑠璃子、お前が出たいというのはわかる。これまで一生懸命練習してきたからな。だがお前が怪盗 韋駄天に誘拐されたら、大勢の人に迷惑がかかるのだよ。お前を守るための警備だけでも大変な人がいる。警察に頼めばタダで警備をしてくれるかも知れない。しかしそれも市民が納める血税でまかなわれる・・・」

「怪盗 韋駄天はその日を狙っているとは書いていないのでしょうか。また別の日を狙うかも知れません。このお屋敷にいても誘拐しようとすればできますわ。コンサート会場で誘拐するとは限りませんわ・・・」

「確かに日時は書いていない。けどその日が一番危ない。疑いがあるのだ、危険は避けなければならぬのだよ」

「私はどうなってもいい、それでもコンサートに出たいのです。お願いお父様、出させて下さい」

瑠璃子さんは頑なにコンサートに出たいと言い張る。意地っ張りの一人娘に小里社長は困り果てて、外内探偵の方を黙って見た。

「いいでしょう。お嬢さんがそんなに出たいというのなら出ても構いません。その代わり常時仲田さんがつきっきりで警戒に当たります。それなら怪盗 韋駄天も容易に手が出ないでしょう。ねえ仲田さん・・・」

仲田探偵に同意を求めた。一同は仲田探偵の方をじっと見る。

「ええ、確かに難しい警備となると思いますが、お嬢さんは私どもがつきっきりで警備します。どうぞご安心下さい」

「有難うございます。どうしてもこのチャリティーコンサートに出たかったのです。私、小さい時からピアノを習っていて多少の心得があります。それでアルバイトがてら知り合いの娘さんに教えているのです。その娘さんは私とそのチャリティーコンサートに出ることをとても喜んでくれているのです。その娘さんのためにもぜひ出たかったのです」

瑠璃子さんは嬉しそうにはしゃいだ。

「大丈夫です。お嬢さんは、わたくし仲田和彦が怪盗 韋駄天から必ずお守りします」

仲田探偵が胸を張って豪語した。

「それからなるべく警察には知らせないで下さい。警察が入るとマスコミに伝わってしまいます。娘は見合いしたばかりで、この縁談にはできればまとまって欲しいのですが、マスコミに知られ、妙な噂が立っては困ります・・・」

小里社長は世間体を気にしている。嫁入り前の娘のことだから当然かも知れない。それに警察を余り信頼していないようだ。

「わかりました、警察にはできるだけ知らせないようにしましょう」

その日から池下の小里邸には仲田探偵を初めとする探偵、警備員詰めかけてぴりぴりしていた。瑠璃子さんはもちろん女性である。男性である仲田探偵が常にピッタリと瑠璃子さんに貼りつくことはできない。それで仲田探偵の部下の女性探偵が一人、ピッタリと貼りつき瑠璃子さんを守った。

瑠璃子さんは自室に閉じ籠もり、コンサートのためにピアノの練習をしていた。

この小里邸のピリピリとした雰囲気を感じた少年がいた。瑠璃子さんの従弟の小里博史君である。博史君はまだ中学二年生の十四歳である。お父さんは小里社長の弟になり、家も隣同士だから小里邸の様子がよくわかる。。

その日も遊びに来たのだが、お手伝いの加代子さんに追い返されてしまった。

「博史坊ちゃま、今大変なことになっているから、お家に戻って下さい・・・」

博史君は仕方がなく、戻ろうとしたが、好奇心旺盛な少年のこと、小里邸で何かあったのだと直感した。小里邸の前に停めてある自動車の影に隠れて、小里邸を見張った。

確かに見たことのない人たちが小里邸に出入りしている。小里社長の仕事の関係者で出入りするかも知れないが、どうも仕事の関係者ではなさそうだ。

背の高いがっしりとした体つきの中年。その人の目は鋭く、辺りを警戒するように小里邸の門をくぐり中に入る。どうも普通の人とは違う。

もちろんその男が外内探偵から瑠璃子さんの警護を任された仲田探偵であるが、やはり好奇心旺盛な少年の目からして、その姿は異様に映った。

好奇心が人一倍旺盛な博史君は大の探偵小説好きだ。その探偵小説好きがこうじて友達同士で探偵少年団なるものを結成している。早い話が江戸川乱歩の創作した少年探偵団を単に反対に読ましたものである。中学生から高校生まで十五人ほどで集まった探偵小説同好会といった方がいいだろう。

そのリーダーは西沢翔太という高校一年の少年だった。西沢少年の家は昭和区の南山である。お父さんの西沢行彦氏は大学で民俗学を研究している教授であった。

実は西沢少年は怪盗 韋駄天とはちょっとした因縁があった。と言うのも、西沢少年の隣の屋敷はさる資産家の屋敷で、数ヶ月前に怪盗 韋駄天が脅迫状を送りつけ、そして高価な絵画を盗もうとしたことがあった。しかしその目論見は外内探偵の前にもろくも崩れ去った・・・と言う事件があった。その事件に西沢少年は深く関わっていたのだ。

博史君は伯父である小里社長が経営する千歳堂で、怪盗 韋駄天が“ナイルの涙”の強奪に失敗したという事件を知っている。そのため、今、小里邸を包んでいるピリピリとした警戒が、やはり怪盗 韋駄天によるものでは・・・と言う考えが博史君の頭を過ぎる。

やはり情報が漏れてくるもので、それが従姉の瑠璃子さんに関わるものであるということを知った。お手伝いの加代子さんから漏れてくるのだ。そして、今度の日曜日に行われるチャリティーコンサートがもっとも危険であることも耳に入ってきた。

とすることで、今、伯父の家で何か起きているということを逐一、リーダーの西沢少年に報告している。西沢少年は瑠璃子さんのことはよく知らないが、とても心配した。

「今日の日曜日にチャリティコンサートがあるのです。その時が怪盗 韋駄天が動くときだと見ているようです・・・」

「今日の日曜日に・・・。僕たちもそのコンサートに行ってみよう」

西沢少年が勇んで言う。博史君はさらに続いて顔を曇らせて言った。

「それで外内探偵なのですが、最近顔を見せないのです。伯父さんも“ナイルの涙”を怪盗 韋駄天から守ってくれたから外内探偵を信頼しているのですが、別の探偵を呼んでいるのです。何かあったのだと思うのです・・・」

「誰だろう・・・どんな人が来ているの・・・？」

西沢少年はその探偵の人相を聞いた。

「身長が百八十センチぐらいあり、がっしりとした体格で目の鋭い四十歳ぐらいの探偵です。誰だかわかりますか？」

「うーん・・・ そんな人は思い当たらないな。東京か大阪から呼んだのかな？」

西沢少年は名古屋の探偵業者を大体は調べているが、その人物について思い当たらなかった。その人物とはもちろん外内探偵が連れて来た仲田探偵である。

瑠璃子さんは不安の中で日曜日の朝を迎えた。

(やっぱりコンサートは欠場した方が良かったのかな・・・)

独りになると、いつもこのことが頭の中を駆け巡った。そのことで昨夜は一睡もできなかったのだ。

しかしコンサートに出場することは自分で決めたこと、いまさら取りやめることもできない。仲田探偵や多くの警備員が怪盗 韋駄天から必ず守ってくれる。なにが起ころうと動じないようにしようと思った。

コンサートは名古屋の東隣にある長久手町のコンサートホールで開かれる。コンサート会場へは多くの友人や、ピアノを教えている知り合いの娘さんが応援しに来てくれた。瑠璃子さんもこの日のために作った華やかなドレスを身に纏っていた。

「先生、今日のコンサートを楽しみにしていました。頑張ってください」

教え子の女の子が励ましてくれた。

「ありがとう。みんなの応援があるから頑張れるんだわ」

いろいろな人たちの応援が励ましになっていることをあらためて知った。

しかしお見合い相手の鈴木章二が来てくれたことには驚いた・・・と言うよりも、むしろ戸惑った。知り合って間もないお見合い相手。父の薦めで気の乗らないお見合いして、それほど親しいというわけではないから、彼にはチャリティーコンサートのことは話していない。しかしどこで知ったのか鈴木章二も会場に来ていたのだ。

「瑠璃子さん。演奏、頑張ってください。僕も応援しています。僕はあなたのためならどこまでも行きます」

鈴木章二は瑠璃子さんの細くてしなやかな指をなれなれしく握り締めて、気取った語り口で囁

くように言った。これには瑠璃子さんもげんなりしていた。

コンサートは滞りなく進み、間もなく瑠璃子さんの番が来る。

7 決行

しかしその少し前だった。瑠璃子さんの控え室にコンサートの関係者から連絡が入った。

「小里さん、小里瑠璃子さんに電話が入っています、至急受付まで来てください」

瑠璃子さんは何だろうと、呼ばれるまま、入場口横の受付に向かう。もちろん彼女につきっきりで護衛している女性探偵も同行した。

「小里ですが、電話が入っているみたいですね・・・」

瑠璃子さんは受付の窓を開け、関係者に聞いてみた。

「小里さんですか？ 中村百合子さんという方からお電話が入ってましたが切れてしまいました・・・」

事務員はそう告げる。中村百合子さんならよく知っている、大学の親しい友人だ。それならこちらから電話をかけようとした。

「あの、電話をお借りできませんか？」

「そちらの電話ボックスをお使ください」

事務員はロビーの隅にある小さな電話ボックスを指さした。木製の電話ボックスである。扉が開かれ電話が置かれている。

瑠璃子さんは関係者に礼を言うと、女性探偵と一緒に電話ボックスに向かう。そしてボックスに入ると「待ってて下さい」と、女性探偵に告げて扉を閉めた。女性探偵がいつも横にいるから話を聞かれたくないのだ。女性探偵は不審な人物がいないかボックスに背を向けて警戒をしている。

それから二、三分ほど過ぎた。しかし瑠璃子さんは電話ボックスから出てこない。この電話ボックスは窓がないから中の様子が見えないのだ。

女性探偵は不審に思い、耳をすまして聞き耳を立てるが、声が全く漏れてこない。これはおかしいと直感した女性探偵はドアをノックした。

「瑠璃子さん、どうしましたか？ 何かありましたか？」

しかし中からは何も返事がない。これは変だと思った女性探偵は電話ボックスのドアを開けた。しかしそこには瑠璃子さんはいなかった。受話器は元に戻してある。そして白いハンカチが・・・女性探偵はそのハンカチを手にとると強い刺激臭がつーんと鼻をついた。恐らくクロロフォルム、瑠璃子さんはそのクロロフォルムで睡らされ拉致されたのだ。

それではどこから連れていかれたか・・・そんなことを考えている暇など無かった。女性探偵は急いで控え室に戻り、瑠璃子さんが失踪したことを仲田探偵に伝えた。

「何、瑠璃子さんがいなくなった。なんて言うことだ、君が付いていながら・・・どうしていつも側に付いていなかったのだ！」

仲田探偵は瑠璃子さんを見失った女性探偵を叱責した。

「すみません。私に電話を聞かれるのがいやだったようで、電話ボックスのドアを閉めてしまったものですから、中の様子がわからずに気が付いたらいなかったのです」

べそをかいて弁解をする。二人はホールの入り口に急いだ。その間に無線機で警備員に命じ

てホールの出入り口をすべて封鎖させた。

仲田探偵は出入り口の横の電話ボックスをあらためて調べた。

「君はこのボックスの外でずっと待っていたんだね。その間、全く眼を離していないのだね？誰も近づいていないんだね」

「ええ、ドアの外でずっと待っていました。二、三分ほどしても出てこないの、声をかけましたが返事がないのでドアを開けたら瑠璃子さんはどこにも居ませんでした。このハンカチがありました。クロロフォルムを嗅がされたのでしょうか」

女性探偵はクロロフォルムらしき薬品を染み込ませたハンカチを仲田探偵に見せた。

「これで瑠璃子さんを睡らせたのか。君はその間ずっと外にいたんだね。それなら瑠璃子さんはどこから運び出したのだろうか？」

仲田探偵は電話ボックスの中に入り、上から下までじっと眺め隅々まで調べた。ドアの外には女性探偵がいるからそこからでは無理だ。それではどこから運び出したのだろうか？壁は上と下では材質が違う。上はグレーの無地の材質だが、高さ九十センチぐらいから下は、木目調の立て板が何枚も張ってあるデザインだ。恐らくそのような化粧板になっているのだろう。

仲田探偵はこんこんと壁を叩いた。別に変哲もない壁である。上から下へと位置を換えて叩いてみる。一カ所だけ、反応がおかしかった。それは明らかに薄い材質で、その奥が空洞になっているのが感じられる。

「ここが何かおかしい。この裏はどうなっているのだね」

興味深く覗いていたホールの事務員に聞いてみた。

「この裏は荷物室になっています。コンサートに出演する人たちの荷物を預かっている部屋です」

仲田探偵はポケットからナイフを取りだし、慎重に壁の立て板の隅をほじくると、板は簡単に外れた。高さは八十センチ幅は五十センチほどの横穴が現れた。

「あー、誰だ、いつの間にこんな穴を開けやがって！」

穴が空いていることを知った事務員が、素っ頓狂な声を上げた。

「恐らくこの穴から瑠璃子さんを運び出したのだろう」

確かに事務員の言うとおりに、壁の裏はコンサートに出演する人たちの荷物置き場になっていた。楽器のケースが所狭しと並んでいる。しかし瑠璃子さんらしき姿はない。

「どこかにいるはずだ、調べてくれ」

警備員達は楽器のケースを一つ一つ開け中を調べるが、どこにも瑠璃子さんは居ない。「どこにもいない。すでに瑠璃子さんを運び出したのかも知れない。ここから荷物を運び出した奴はいなかったかね？」

出入り口を見張っていた警備員に聞いてみた。

「そう言えば少し前に楽器のケースを運び出していた人がいました」

「どのようなケースだ？」

「一メートル角ぐらいの大きさの黒い大きなケースでした。ドラムが入っているとってました」

「それぐらいの大きさなら人一人入ることができる。それだ、そいつが瑠璃子さんを運び出したのだ。どこへ行ったかわかるか？」

「駐車場へ行ったと思います。あれぐらいの大きさだと車じゃないと運べません」

「駐車場にまだいるかも知れない。みんな来てくれ！」

仲田探偵と警備員達は駐車場へ急いだ。そこには今まさに駐車場から出て行こうとするライトバンがあった。

「あのバンかも知れない。おい、車を持ってこい。追跡するぞ！」

女性探偵が車を用意してきた。それに仲田探偵が乗り込みライトバンの追跡を始める。女性探偵の運転技術はかなりのもので、遙か先を突進する犯人とおぼしきライトバンを追跡し、徐々に距離を縮めていく。間には一台の車と一台のオートバイを挟んだだけだ。

「奴らは気付いていない。よし、この調子で追跡しろ」

犯人のライトバンは街道を東へと突進していく。女性探偵は付かず離れず追いかける。しかしその時だった。前を走っていた車が突然停車した。もちろん信号が赤になったからである。前を走っていたオートバイはその車をよけて信号を突っ切って走り去った。危うく追突しそうになった女性探偵は急ブレーキを踏んだ。

横から次々と車が交差点を横切っていく。

信号はなかなか青にならない。犯人のライトバンは遙か先へと消えていった。

信号が変わり追跡を再開するも、もうライトバンはどこにも見あたらない。

「しまった、奴らに巻かれた」

仲田探偵は地団駄を踏んで悔しがった。

時は少し前になる。コンサートホールの駐車場の生け垣の影に二人の少年が息を殺し潜んでいた。一人は瑠璃子さんの従弟になる小里博史君である。そしてもう一人は博史君の先輩で探偵少年団のリーダー、西沢翔太少年だった。

西沢少年は瑠璃子さんを拉致して運び出すには車が必要だと予想して、博史君と一緒に駐車場を見張っていたのだ。

一台のライトバンが駐車場を出ようとしている。フロントガラス以外はスモークガラスが張られて中の様子がわからないライトバンであった。もちろん西沢少年はこのライトバンを怪しいと踏んだ。

「あのライトバン、スモークガラスが張ってあり、怪しいよね」

博史君が言うと西沢少年も、

「ああ、怪しい。追いかけてよう」

事実、警備員達がホールから飛び出てきて慌てふためいていた。そしてそのライトバンを追いかけてようとする車があった。

西沢少年は自動二輪の免許は持っていてオートバイでこの会場に来ていた。二人はオートバイに跨ると、怪しいライトバンを追跡した。細い道から四つ角を右折して街道に出た。しかし間に一台の車を挟んでしまった。西沢少年は一台の車を挟んでライトバンを追跡する。

「あっ、危ない！」

後ろに乗っていた博史君が大声で叫んだ。信号が黄色になり、前を走っていた車がブレーキをかけたのだ。紅いストップランプが輝き、バイクと距離がみるみるうちに縮まり、追突しそうになった。

とその時だった、運転していた西沢少年はハンドルを切り、前の車をよけて、スロットルを全開にして赤になろうとしている信号を突っ切って、バリバリッと大きな排気音を残して追いかけた。

しかし後ろの車は、停車した車が邪魔になり信号を渡ることができない。もちろんその車に乗っているのは、瑠璃子さんを警護していた仲田探偵と彼の助手の女性探偵である。

その頃、コンサート会場では瑠璃子さんの番が来ても、瑠璃子さんは舞台上に上がらない。異変に気づき会場内が次第にどよめきだした。

もちろん一番驚いたのは怪盗 韋駄天に予告状を受け取っている父の小里社長であった。ああ、娘の身に何かあったのだ。小里社長はそう直感した。そして急いで会場を出て仲田探偵を捜した。

「おい、仲田君、仲田君はいないか！ 何があったのだ！」

しかし仲田探偵の姿はどこにも見あたらない。ホールには右往左往して慌てふためいている警備員の姿しかうつらなかった。

それから間もなくしてライトバンの追跡に失敗した仲田探偵が女性探偵と一緒に戻ってきた。その姿を見て小里社長は詰め寄った。

「娘は、瑠璃子はどうしたのだ？」

「怪盗 韋駄天にやられました。お嬢さんは電話ボックスに入ったのですが、そこにこのような仕掛けがしてあり、隣の道具置き場に連れ出され、大きな箱に入れられ連れ出されました。全くうかつでした」

仲田探偵は無念と言うよりも、落胆した口調で告げた。

「連れ出されたって！ おい、どうなっているのだ。私は君たちを信頼して任せただぞ。これなら警察に知らせた方が良かった。本当に役立たずだ。外内君にはこの失態を連絡したのか？」

小里社長は眉間に皺を寄せ、かなり興奮しているのか、こめかみには青筋が浮き出ている。その姿に怖じけずきそうになる。

「全く面目ありません。このことは外内探偵に報告しました。外内探偵は向こうの仕事がすでに済んでいるので、今こちらの方へ向かっています」

「外内君には連絡が付いたのか。彼と話をしたい。もう一度連絡してくれ」

やはり外内探偵には信頼を寄せているせいか、こちらに向かっていると聞き、多少の安堵からか強ばっていた表情が弛んだ。

仲田探偵はコンサートホールの受付で電話を借りて外内探偵を呼び出した。

「外内探偵に繋がりました」

仲田探偵は小里社長に受話器を渡した。

「小里だが、瑠璃子が拉致されてしまったぞ。どうなっているんだね。君を信用して任せただ

。瑠璃子に万が一のことがあったら、どう責任を取るんだね」

外内探偵の声を聞き、行き所のない怒りが沸々と込み上げてきた。

「ご心配なく、瑠璃子さんのアクセサリーに音波発信器が取り付けられているから、今、どこにいるか僕にはすぐにわかります。怪盗 韋駄天は東へ向かっています。恐らくそちらの方に怪盗 韋駄天のアジトがあるのでしょうか。一刻の猶予もありません、僕は直接怪盗 韋駄天のアジトに乗り込みます。安心して僕に任せて下さい」

「そうか、それなら君に任せよう。とにかく瑠璃子だけは無事に帰してくれ」

「わかりました。全力を挙げてお嬢さんを取り戻します」

そう言って電話は切れた。

その頃、瑠璃子さんを拉致したライトバンは三河の山の奥へと向かっていた。そして別荘地の中に入っていく。その辺りは瀟洒な別荘が何軒か建っていた。その中の一軒にライトバンを着ける。斜面に建っている二階建てログハウス調の大きな別荘だった。

二人の男が下りて荷台から黒塗りの大きなケースを運び出した。

もちろんその箱の中には瑠璃子さんが詰め込まれている。拉致される時、クロロフォルムを嗅がされて睡らされていたが、その効果が切れて意識を取り戻し、ケースの中でバタバタしているのがわかる。

しかし二人の男はそんなことお構いなく、箱を別荘の中に入れると嚴重に鍵をかけた。そしてケースを二階の一室に入れると、ケースの蓋を開けた。中にはぐるぐる巻きに縄で身動きできないように縛られ、口には猿轡をされた瑠璃子さんが現れた。

瑠璃子さんをケースの中から出して縄を解き猿轡を取ると、

「あなたたちは誰なのですか？ こんな真似をしてただではすみませんよ！」

気丈にも瑠璃子さんは二人の男を叱りつけるように言った。

「お嬢さん、手荒いことをして済みません。ボスの言いつけなのです。しばらくの間、この部屋でおとなしくして下さい。おとなしくしてくれれば何もしませんので安心して下さい。しかし逃げようとすればただではすみませんぜ。窓はすべて開かないから逃げるに逃げられませんけどね・・・」

男は凄んで見せた。そして部屋から出て行く。その後でドアノブを回してみたが、鍵がかかりびくともしない。叩いてみるが頑丈で女の力では壊すこともできそうになかった。

とんでもないことになった・・・自分は一体どうなるのだろうか？

どこかに売られてしまうのではないか？ 無事我が家に戻れるのだろうか？

家族はどんなに心配しているのだろうか・・・。

止めどもない不安が次々襲い、彼女を暗く包んだ。

コンサートなんかに出場しなければよかったと、後悔だけがさきに立った。

ふと、一人の床の顔が浮かんだ。チャリティコンサートに出場することに反対した外内探偵だ。あの人の言うことを聞けばよかった。我が儘を押し通して出場したからこんなことになってしまったのだ・・・と、あの探偵の言うとおりにすればよかった。

でも何とかしなければ・・・気丈にも瑠璃子さんはどうすればここから脱出することができるかと、部屋の中を見廻した。

部屋は二十畳ほどの広さがあった。床はふかふかのカーペットが敷かれ、入り口の横には大きなベッド、窓側にはテーブルとソファのセットが置かれている。そして壁側の家具の上に大きなテレビが置かれている。天井からはキラキラとしたシャンデリアが吊り下がっている。それは高級ホテルの一室といった感じだ。

ドアは外から鍵かかかっていることは先ほど確かめた。それでは窓はどうなっているかと、窓を調べるがどれも嵌め殺しで開くことはできなかった。よく見るとガラスは厚く二重になって

いる。どう見ても壊れそうになかった。仮に壊したとしても、この部屋は二階の一室、しかも斜面に立てられているので、三階分の高さがあり、地上まではかなりの高さで逃げ出すことができるだろうかと思えた。

どうみてもこの部屋から逃げ出すことはできそうにない。くよくよもしたくなる。ベッドの上で横になった。

もし無事ここから助けられたら・・・まず何をしたいと言われたら、燃えるような恋をしたい・・・それ以外になかった。

これまでにいろいろな人から声をかけられた。しかしそれをすべて断った。というのも小里社長から、一人娘と言うことで将来婿養子をもらうことを厳命されており、父のすすめでお見合いを何度もしてきた。その結果、恋らしい恋を知らずにこの歳まで来てしまった。それがどんなに味気ない人生だったのだろう。

しかし心の底にはいつか、運命の人が現れるという希望を抱き続けてきた。

このまま元に戻ることができないかも知れない。最悪の場合、殺されることも考える。

そう思っただけで、今まで自分で押し殺してきた、そして対象になる人の無かった恋愛感情・・・心の底から誰かを好きになりたかった。

コンサートホールから瑠璃子さんを拉致したライトバンをオートバイで追跡していた西沢少年と瑠璃子さんの従弟の小里博史君。

ライトバンの運転手が暢気なせいか、相手に気付かれることなく三河の山奥の別荘地まで追跡することができた。そして黒い大きなケースをライトバンから降ろして別荘の中に搬入するところを遠巻きに確認できた。

「あの別荘が怪盗 韋駄天のアジトなんだ」

「そうみたいです、あのケースの中に瑠璃子姉さんが入れられているかも知れません。早く姉さんを助け出さないと・・・」

博史君は従姉である瑠璃子さんを心配して、何とかしないと気が焦った。

「怪盗 韋駄天の仲間があの別荘の中にいるだろう。敵がどれだけいるかわからない、下手に踏み込むと僕たちが捕まってしまう。ここは警察に通報した方がいいだろう。並木警部は僕も知っている。博史君、ここで別荘を見張っててくれ、僕は警察に連絡してくる」

西沢少年は慎重に事を進めようとした。

「何があってもここを動いては駄目だよ」

そう口ずっぱく言うと、オートバイに跨り、警察に連絡をしに行った。

この辺りは山奥のために、電話をかけるところがなかった（携帯電話の普及していなかった時代だと思ってください）。

ようやく喫茶店を発見してそこで電話を借りて愛知県警の並木警部に連絡した。

「並木警部ですか。僕は西沢といいます」

「西沢君か、久しぶりだね、元気にやっているかね、学校はちゃんと行かないといかんぞ」

並木警部が暢気に電話に出た。

「怪盗 韋駄天のアジトを発見しました。千歳堂のお嬢さんを拉致しています。今、友達がアジ

トを見張っています」

「なに、怪盗 韋駄天のアジトを発見しただと！ 千歳堂のお嬢さんを拉致して・・・そこはどこなんだ？」

「三河の山奥の別荘地です」

「わかった、これからすぐ向かう。それで千歳堂のお嬢さんは大丈夫か？」

「怪盗 韋駄天は人に危害、特に女性に手を出す奴ではありません。だから大丈夫だと思います。しかし中の様子がわからないのでどうなっているかわかりません」

「とにかくじっとして、警察が行くまで待っている」

そう言って電話を切ると、西沢少年は別荘まで戻った。陽はかなり傾いている。

「並木警部はすぐに来ると言った。一時間ぐらいで来ると思う。別荘に何か動きはなかったかい？」

「男が一人、別荘の中に入っていました。僕たちと同じようにオートバイで来ました」

「どんな男だった？」

「ヘルメットをかぶっていたから顔はわかりませんが、小柄な男です」

「そいつが怪盗 韋駄天なのかな？」

西沢少年は怪盗 韋駄天の顔を見たことはない。変装の名人だから、彼の本当素顔をみる機会はなくとっていいほど無かった。

「瑠璃子さんが拉致されたままだし、中の様子がわからないから、下手に動くことはできない。並木警部が来るまでここで様子を見ていよう」

西沢少年と博史君はじっと別荘を監視しながら並木警部の到着を待った。

並木警部は一時間後に到着した。数台のパトカーと機動隊を乗せた警察車両は怪盗 韋駄天に気付かれぬように別荘から離れたところに停めて、徒歩で別荘に来て西沢少年達と合流した。

「西沢君、何か動きはあったかい？」

「小柄な男がオートバイで来て中に入っていたみたいです。それが怪盗 韋駄天かも知れません」

「小柄な男か・・・すばっしっこい奴だから小柄かもしれないな、たぶんそいつが怪盗 韋駄天かも知れないぞ」

並木警部自身も怪盗 韋駄天のことはよく知らない。何せ変装の名人だから、素顔をみたことはない。双眼鏡で別荘を覗くが窓はカーテンで閉められて中の様子がわからない。

その時だった、別荘の中から乾いた音がパン、パンと二回鳴った。なにがあったんだと、別荘を囲んでいた警官隊に戦慄が走った。

「瑠璃子姉さんが、瑠璃子姉さんが・・・」

瑠璃子さんを心配していた博史君が悲痛な叫びを上げた。

「警部、突入しましょう。みな訓練された隊員ばかりです、一刻の猶予もありません、突入しましょう！」

「わかった、突入するぞ！」

警官隊が別荘に突入した。

ほんの少し前のことである。拉致されて別荘の一室に幽閉された瑠璃子さんは悲嘆に暮れていた。その瑠璃子さんの耳に、別荘の下の部屋から、乾いた音が二発、パンパンと銃声の音が聞こえた。

なにがあったんだろう。瑠璃子さんの頭の中は真っ白になった。

階段を登ってくる音が聞こえた。ああ、私を殺しに来たんだ。今度は私がその銃で撃たれるのだ。恐怖で体がガクガク震えた。そして鍵がカッタッと開き扉が開いた。

「瑠璃子さん、大丈夫か。助けに来たよ」

そこにいたのは見たことのある人物。それは忘れもしない、外内探偵であった。

ああ、救われたのだ。やっぱり白馬に乗った王子様が助けに来てくれたのだ。

「そ、外内さん……」

「瑠璃子さん。もう大丈夫だよ。下の奴らは僕が倒した。さあ、お家に帰ろう……」

彼の顔を見たとき、嬉しさに涙がぽろぽろと流れてきた。

「こんなに涙を流して、よっぽど怖かったんだね。もう大丈夫だから安心して。涙を拭いて……綺麗な顔が台無しだよ……」

外内探偵はハンカチを取りだして涙を拭いてくれた。

「ありがとうございます、ありがとうございます」

涙を流しながら、何度もお礼を言う。

瑠璃子さんの瞳は恋する乙女のように光り輝いている。外内探偵が眩く見えた。

よく見ると腕に怪我をしている。背広が破れて、ワイシャツが紅く染まっているのではないか。ナイフで切られたのだろうか？

「あの、お怪我をしています……大丈夫ですか？」

「ああ、これ、大丈夫だよ。ちょっと痛むけれどね。瑠璃子さんのためなら、命を惜しまない。それよりも瑠璃子さんが無事でよかった」

この人は私を命がけで助けに来てくれたのだ。私の白馬に乗った王子様なのだ。

「正直に言おう、瑠璃子さん、僕はあなたを初めて見たときから、僕の心はあなたで一杯だった、あなたのことが好きなんだ」

外内探偵は瑠璃子さんの細い体を抱きしめた。そして顔が徐々に接近していく。

唇が迫ってきた。恋らしい恋などしたことのない乙女にとって初めての口付け。

胸がどきどきした、これが本当の恋なのだ、憧れていた恋なのだ。ああ、もうどうなってもいい、この人に身を任せたい……。

瑠璃子さんもうっすらと目を閉じて、唇を尖らせ、熱いベエを受け入れようとする。

と、その時だった、扉がバタンと開いて、数人の人が入ってくる。

口付け寸前だった二人は驚いて目を開き、顔を離して扉の方を見た。

「お嬢さん、もう大丈夫です。助けに来ました！」

並木警部が突入してきたのだ。外内探偵は瑠璃子さんの体を離した。

「並木警部！ どうしてここに……？」

「何だ、外内君ではないか。どうして君がここにいるんだ？」

「瑠璃子さんを救いに来たのです。瑠璃子さん、もう大丈夫です」

「さっきの銃声はどうしたのだね」

「この別荘に入るときに、怪盗 韋駄天の手下が撃ってきたのです。でも大丈夫、手下は僕が倒してロープで縛りました」

「下の男は君が縛ってくれたのか。大手柄だね、突入したけれど抵抗がないから拍子抜けをしたんだ。しかも二人縛られている。西沢君が言っていた別荘に入ってきたのは君だったのか。チャンスを見て二人を倒したのだね。いや大手柄だよ、外内君」

並木警部は外内探偵の肩を叩いて、その労をねぎらった。

「いや、そんな活躍はしていませんよ。僕のせいで瑠璃子さんを怖い目に遭わせてしまったのです。彼女を救い出すのは当然のことです」

「お嬢さん、小里社長が御心配なさっている、元気な姿を小里社長に見せてやって下さい」

そう言うと無線機で、瑠璃子さんを無事保護したことを伝えた。

瑠璃子さんは警察官によって小里社長の待つ池下の屋敷に送られることになった。

外内探偵も瑠璃子さんと同行しようとするが、

「外内君、現場検証がまだ残っている、君はここに残ってくれ、色々話を聞きたいしな」と、外内探偵を引き留めた。

「わかりました、ここに残ればいいのですね」

聞き分けのいい様子だが、内心は警官に送られていく瑠璃子さんに未練があるようだ。

入れ替わりに西沢少年が二階に上がってきた。博史君は瑠璃子さんと一緒に池下の自宅に送ってもらえるようだ。

西沢少年はじっと外内探偵を見ている。その目はどこか訝しげだった。

「外内さん、あなた、本当に外内さんですか・・・？」

いきなり外内探偵に対し本物かどうかを訊ねた。

「なにを言っているのだ、君は。僕は本物の外内祐太郎だよ」

「そうですか？ それならこの別荘に入ってきて、銃声がして怪盗 韋駄天の部下を倒すまで、ずいぶん時間がかかりましたね。その間、なにをしていたのですか？」

博史君の話では、西沢少年が並木警部に電話をかけにいつている間に、ヘルメットをかぶった小柄な男が別荘に入ってきたという。それから誰も入っていないようだから、その男がこの外内探偵ということになる。それから一時間以上かかっている。その間、外内探偵はなにをしていたかをこの男に聞いたのだ。

「二人の部下を倒す隙を見ていたんだ。もし一人を取り逃がしたら、二階に上がって瑠璃子さんに危害を与えるかも知れないから、同時に二人を倒す隙を探していたんだ」

「本当ですか・・・？」

西沢少年は外内探偵を信用していない。

「並木警部、この人は外内探偵ではないですよ」

「本当か、西沢君？」並木警部は狐に摘まれたような表情だ。

「なにを言っているのだ、こいつは。並木警部、僕は本物の外内祐太郎ですよ。警部はこんなガ

キのことを信じるのですか？」

「どっちの言っていることが本当なのだ・・・私の目からは本物の外内君にしか見えないのだが、西沢君、なにが言いたいんだね、どこが違うというのだね？」

並木警部は訝しげに外内探偵を偽物だという西沢少年を見た。何となく違うじゃ、警察では通用しないのだ。

「外内探偵は・・・外内探偵はこんな立派な人ではありません！」

部屋の中は一瞬、シーンと沈黙が漂った。

「外内探偵はお金がないからいつもよれよれのGパンとTシャツを着ています。こんなに立派な背広なんて着たのを見たことがありません。大体、外内探偵というのは助平でモテもしないのに錦のキャバクラでお姉ちゃんを口説いている。どうせ、キャバクラで変な女に捕まって誘惑されてのこのこと付いてって、睡眠薬でも飲まされて拉致されたのでしょうか。そんなだらしのない男なのですよ、外内探偵という人は」

そうなのだ、外内祐太郎は表向きは探偵と名乗っているのだが、所詮は駆け出しの探偵、仕事などまともに来ないから、ほとんどアルバイトで生計を立てている。当世風に言えばフリーターといった方があっている。大体頭がモジャモジャなのも、名探偵と誉れ高い明智小五郎や金田一耕助をまねているのじゃなく、単に床屋代を節約して滅多に行かないからモジャモジャになっているに過ぎなかった。

「・・・・・・・・」外内探偵は反論できない。

その時だった、部屋の入り口で一人の警官が物言いたげに立っているのを並木警部が気付いた。

「どうしたのだ？」

「地下室でこのような男が閉じ込められていました」

警察官の後ろから一人の小柄な男が現れた。よれよれのTシャツにGパンを穿き頭がモジャモジャな貧相な男。先ほど西沢少年が言った外内探偵と酷似している。

「この糞ガキ、黙って聞いていやがれば散々、俺の悪口を言いやがって！」

男は西沢少年を詰る言葉を吐いた。

「どういうことだ、外内君がここにもいるぞ。どっちが本物なのだ？」

並木警部が素っ頓狂にいう。その男は西沢少年が言う外内探偵なのだ。

「警部、こいつは偽物だ。私の変装をしているのだ、こいつが怪盗 韋駄天なのだよ」

背広を着た外内探偵が言うと、

「そいつが怪盗 韋駄天だよ。俺の変装をしていやがるだけだ。でもそっくりだな、まるで鏡を見ているようだ」

二人の外内探偵が言い合いをして、間に挟まれた並木警部は狼狽えた。

「どうしてこんなところに閉じ込められたのですか？」

と、西沢少年がよれよれのTシャツを着た外内探偵に聞いた。

「いや。錦のキャバクラで、チェルシーちゃんにアフターをしようと言われて、ホテルに行ったんだが、精力剤を飲んだら何だか眠くなってきて、気が付いたら地下室に・・・・・・・・なにを言わせる

のだ、このガキは！」

顔を真っ赤にして西沢小年に噛みついた。西沢少年の言うとおりの拉致のされ方だ。

その時だった、再び警察官が犯人の仲間とおぼしき人物を連れて来た。

「警部、このような人物が、別荘を覗いていましたので連れて来ました」

それは黒ずくめの服を着たヘルメットをかぶった小柄な人物。ヘルメットを取るとそこに現れたのは女の顔。どこかで見たことのある女、それは仲田探偵の部下で、瑠璃子さんにずっと付き添っていた女性探偵ではないか。

「私は外内探偵に用事があってきたのよ。手を離しなさいよ」

女性探偵が警察官の掴んでいた手を突っぱねた。

しかしよれよれのTシャツを着た外内探偵が思いがけない名前を口にした。

「チェルシーちゃん、どうしてここへ・・・？」

何とこの女性探偵が、よれよれ姿の外内探偵を拉致したキャバクラ嬢と言うことになる。

もちろん背広をびっしと着た外内探偵も動揺した様子だ。

「この女がキャバクラ嬢と言うことか。どういうことなんだ、この女に拉致されたと言うことはやっぱりあんたが本物の外内君と言うことか？」

並木警部はようやく話が呑み込めてきた様子である。

「それで大体のことがわかりました。まずあなたは外内探偵をチェルシーさんを使って誘惑しホテルへ連れ出し、そこで睡眠薬を飲ませて拉致をする」

西沢少年が説明を始めた。

「もう何回も言うなよ、そんなことを」

自分の失態を何度も聞かされ、よれよれの服の外内探偵は耳を塞ぎたい。

「まあ僕の話聞いてください。そして外内探偵になりすまし、仲間に引き込みこんだ千歳堂の峯田専務をつかい、予告状を受け取り恐れおののいている小里社長に紹介させる。外内探偵は以前、怪盗 韋駄天から高価な絵画を守ったことで新聞にデカデカと載りその名は知られているし、小里社長自身、警察を信用していないから、峯田専務に紹介された外内探偵は救いの神でした。そして予告状通り、“ナイルの涙”を強奪する。怪盗 韋駄天の変装した外内探偵が、小里社長の手からそれは偽物じゃないかと騙し“ナイルの涙”を奪い、そして峯田専務に電源を切断させて、その隙に屋上に逃げたことにする。そして警備員に扮して並木警部を屋上に呼び寄せる。そこで黒い服を着た怪盗 韋駄天と、警備員姿の外内探偵が争っているところを目撃させる。そして怪盗 韋駄天から“ナイルの涙”を取り戻す。つまりこれは自作自演だったのです。警備員の恰好をした外内探偵はあなた、そして怪盗 韋駄天は覆面を付けさせれば誰でもよかった。身軽な人ならね。つまりチェルシーさん、あなたでもよかったのです」

「わざわざそんな面倒なことをしなくても、直接“ナイルの涙”を奪った方が手間が省けたらろう。どうしてそんな面倒なことをしなければならないのだ」

背広を着た外内探偵は、西沢少年の説が間違っていることを強調する。

「そ、それは、あなたが瑠璃子さんに惚れてしまったからです。“ナイルの涙”を取り戻せば外内探偵は小里社長から絶大な信頼を勝ち得る。その上であらためて瑠璃子さんを拉致すると脅迫状を

送る」

「瑠璃子さんに惚れているのなら、どうして瑠璃子さんを拉致しなければならないのだ」

背広を着た外内探偵は反論をする。

「子供向けの話しによくあるでしょう。自分の手下に好きな子を虐めさせる。そしてそのいじめっ子をやっつければ、好きな女の子は自分を好きになる。あれと同じですよ。瑠璃子さんを拉致して心細い思いをさせる。そこにあなたが救いにやってくる。それこそあなたは瑠璃子さんにとって白馬に乗った王子様。おまけに怪盗 韋駄天は女を口説くのはお手の物、本物の外内祐太郎を誘惑したチェルシーさんもあなたの女ですからね。純情な瑠璃子さんを口説き落とすなんて朝飯前ですよ。千歳堂の一人娘、瑠璃子さんを手に入れ、入り婿に入れば同時に“ナイルの涙”を手に入れたのも同じことですからね」

「それである時二人は抱き合っていたのか・・・？」

真っ先にこの部屋に突入した並木警部がその時のことを思い出し証言した。あの時外内探偵は瑠璃子さんの熱いベエゼを奪う寸前だった。そこへ踏み込んできたのだ。

「一旦はお宝を諦めて持ち主の信頼を勝ち得て、そして娘を騙し誘惑してもものにするなんてずいぶん気が長い話なんだな。それで瑠璃子さんというのは、そんなにいい女なの？」

女に振られてばかりのよれよれの服を着た外内探偵が、目をキラキラ輝かせながら西沢少年に尋ねた。女には縁がないが、元々は助平な女好きなのだ。

「ええ、凄く綺麗な女性ですよ。でも女性には魔物ですよ。怖い生き物ですよ」

この男はチェルシー嬢にいいように扱われながら、まだ懲りないのかと、しかし瑠璃子さんとの男とでは月とすっぽん、鼻であしらわれるのが関の山だと軽蔑の眼で見ている。

確かに女は怖い生き物である。ここに一人殺気立っている人物がいる。

「そう言うことだったの。あの小娘を誘拐して“ナイルの涙”と交換するんじゃないか。あの小娘に惚れたって本当なの。私という女がいながら、あんな小娘に惚れるなんて許さない。私がどれだけあなたに尽くしているかわかって。それなのに、それなのに」

チェルシー嬢は涙を流しながら隠し持っていた小型拳銃を抜き背広を着た外内探偵、つまり怪盗 韋駄天に銃口を向けた。

「いや、そんなのじゃない。愛しているのは君だけだ、信じてくれ。そんな危ないものは引っ込めてくれよ」

「あなたの言うことなんか信じられない。もう許さないわ」

怪盗 韋駄天は両手を挙げて銃口から逃げ惑う。そして外内探偵に近づいた。チェルシー嬢の握る拳銃も怪盗 韋駄天を追いかける。

「わー、俺の側に寄るなよ、しっ、しっ、あっちに行け！ お前なんか大嫌いだ！」

外内探偵も逃げ惑うが、怪盗 韋駄天はそれでもよってくる。そして二人が並んだ。

同じ顔が二人並んでいる。涙が目を曇らせていることもあり、一瞬どっちが怪盗 韋駄天で、どっちが外内探偵かわからなくなった。目をつぶり引き金が引かれた。

ズドン、大きな銃声が鳴り響いた。

銃弾は外内探偵の体を貫通したかのように、外内探偵は後方へと吹っ飛んでいった。

彼の目に火花が走った。

(ああ、俺はもう駄目だ、短い人生だった、せめて女にもてたかった……)

ほんの一瞬の内にそのようなことが頭を過ぎる。そして目の前が真っ暗になっていく。

「外内探偵、大丈夫ですか？」

「外内君、大丈夫か？ おい、その女を取り押さえろ！」

警官が銃を撃ったチェルシー嬢を取り押さえる。

「大丈夫ですか、傷は浅いです。腕を掠めただけです。大丈夫ですか……」

西沢少年が必死になり抱き起こす。

「くそ、せっかく瑠璃子の熱いベーゼを奪える寸前だったのにいらん邪魔をしやがって。俺の計画が丸潰れだ。このお返しは必ずするからな！」

怪盗 韋駄天はそう捨て台詞を吐いて、窓を突き破り、ベランダからその名の通り韋駄天のように逃げていく。実にすばしっこい奴である。

「外内探偵、怪盗 韋駄天の凶弾に倒れる。瀕死の重傷を負い意識不明の重体！」

そのようなニュースが飛び交った。

しかし実際は貫通したかに思われた銃弾は腕を掠めたただけであった。腕から血は流れていたが、押さえれば止血できる程度であった。おそらく驚いて後ろに倒れたときに頭を打ち脳震盪を起こしたに過ぎなかったのだろう。早い話が怪盗 韋駄天とその情婦、チェルシー嬢の痴話喧嘩に巻き込まれただけである。しかし意識はまだ戻っていない。

だがそのニュースに大変心を痛めている一人の心美しい女性がいた。

「大変、外内探偵が意識不明の重体ですって！ 私のために大怪我をしたのだわ。命をかけて私を助けてくれたのに、どうしてあの人に償えばいいの・・・」

彼女にとって命をかけて助けに来てくれた白馬に乗った王子様が、今、生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされている。こうしてはいられない。

「外内探偵の命が危ないのです、私、病院に行って来ます」

小里社長に告げるが、当然の小里社長は外へ出すわけにはゆかない。

「お前は解放されたばかりだ。そんなところへゆく必要はない。うちの者から誰か行かすから、お前は心配しなくてもいい・・・」

「でも、あの方は私を命をかけて救ってくれた方です。だから私が行きます」

父の命を振り切り、瑠璃子さんは従弟の博史君を連れ、自ら愛車のシトロエンを運転して外内探偵が運び込まれた病院へ向かおうとする。

瑠璃子さんにとり白馬に乗った王子様である外内探偵の意識不明の重体というニュースは彼女にとって想像以上のショックであった。その中に彼に対する仄かに芽生えた恋心も含まれていたからに他ならない。

「あの方が亡くなったら、私はどうしたらいいの・・・？」

車を出そうとするが涙が溢れて、出すことができない。

「心配しないで、瑠璃子姉さん。きっと大丈夫だよ、命を取り留めるよ」

助手席の博史君が慰める。結局車は小里社長に運転してもらい病院に向かう。

車の中で瑠璃子さんは小里社長に告げる。

「お父様・・・私、お見合い、断ろうと思っています」

「え、ああ、お見合いか・・・そうか、断るのか、お前が断るのなら仕方がない・・・」

以前なら激怒していたかも知れないが、その後の調査でお見合い相手の鈴木章二は余り芳しくない青年であることが判明したからだ。とにかく女癖が悪く、多くの女性を泣かせてきた。それに金にも汚く、いろいろなところから借金をしているということらしい。こんな人間を大事な一人娘をやることはできない。しかし彼の人格に太鼓判を押して薦めたのは小里社長自身であるからなかなか断れと言い出せなかった。だから瑠璃子さんがお見合いを断ってくれといったことに素直に同意したのだった。

「自分の結婚相手は自分で決めます」

「そうか、いいだろう。瑠璃子はもう大人だ、自分の人生は自分で決めろ」

芯の強い彼女の決心を父親である小里社長はまだ知らない。

病院に着くと、父親の小里社長は腹がすいたと喫茶店に行ってしまう、瑠璃子さんと博史君の二人だけ受付で外内探偵の入れられた病室を聞き、その病室に向かった。

そこには西沢少年がただ一人、病室の前の長いすに座っていた。並木警部やそのほかの人たちはそれどころの騒ぎではなかった。

「外内さんは大丈夫なのですか？」

瑠璃子さんが今にも泣きそうな顔で、西沢少年に聞いてみた。

「ええ、頭を強く打って意識がまだ回復はしていませんが、命に別状はありません」

「このまま、意識が戻らないということもあるのですか？」

「えっ、いや、それは・・・僕は医者ではないから、そこら辺の所は・・・でもそれほど心配することはないと思います。結構しぶとい人ですから」

「私を助けに来てくれたばかりにとんでもないことになってしまって・・・私はどうすれば、どうすればあの人にお詫びすることができるのか・・・外内さんの話をちゃんと聞いていればよかった。コンサートに出場しなければ、あの人にこんな迷惑をかけなかったのに」

涙が幾筋も零れている。西沢少年は啞然とした。この美女は敵のアジトに果敢に侵入して彼女を助けるという白馬に乗った王子様を演じた外内探偵に変装した怪盗 韋駄天と、キャバクラのチェルシー嬢に騙されてアジトの地下室に幽閉されていた本物の外内探偵を同一人物だと信じているのではないだろうか？ もし勘違いしたままなら、ちゃんと説明をした方がいいのではないだろうか・・・。

その時だった、病室の扉が開いて看護婦さんが出てきた。

「外内さんの意識が回復なされました」

「本当ですか・・・？」彼女の表情がパッと明るくなった。

医者が診断した後、西沢少年と瑠璃子さん、博史君が病室に入った。意識が戻ったばかりの外内探偵はどこか眠気眼のようできょとんとしていた。

「外内さん、意識が戻ってよかった・・・このまま意識が戻らなかったら、私は・・・」

再び瑠璃子さんの目から涙が流れてきた。しかし外内探偵は驚いた表情だ。無理もない、彼にとり瑠璃子さんは、名前も知らない初対面の相手なのだ。その美しい女性が涙を流して彼の意識が回復したことを喜んでいる。

「あ、あの、あなたは・・・誰ですか・・・？」

「私わかりませんか？ 瑠璃子です、外内さんが命がけで助けてくれた瑠璃子です。外内さんが助けてくれなければ、私の命はなかった・・・外内さんは命の恩人なのです」

「瑠璃子さん・・・？ どこかで・・・」

鈍い記憶の底で聞いたことのある名前であるが、どうしてもはっきりとしない。

瑠璃子さんの表情が再び曇り悲しそうな目をした。

「ひょっとしたら記憶がまだ戻っていないかも・・・どうしましょう、私の責任です。ああ、どうすればいいのでしょうか。私がつきっきりで看病させていただきます」

その細くしなやかな美しい手で、外内探偵の手を掴み強く握り締めた。記憶を失った（と勘違いした）ことが、優しい瑠璃子さんの慈愛の精神、責任感をさらに刺激したのだ。

この調子では押しかけ女房のように毎日病院へ看病しに来るかも知れない。

瑠璃子さんの瞳は恋する乙女のようにキラキラと輝いている。

西沢少年は博史君を呼び、病室の片隅でこそこそと耳打ちした。

「大丈夫かな。瑠璃子さん、外内探偵を別荘で命がけで助けに来たように見せかけた怪盗 韋駄天だと思っているよ。やっぱり本当のことを言った方がいいのかな？」

「僕には言えません、瑠璃子姉さん、伯父さんにお見合いを薦められたりで、今まで恋愛らしい恋愛をしてこなかったから、だからこのままそっとしておきたいのです」

「うーん、知らぬが仏、このままにしていた方がいいのかな・・・」

瑠璃子さんほどの美貌と気立てを兼ね備えている淑女なら引く手あまた。もっといい男と結ばれてもいいのに、よりによってへっぽこ探偵を好きになるとは・・・。

西沢少年は瑠璃子さんが気の毒に思えた。

女にかけても凄腕の怪盗 韋駄天が変装した外内探偵に誘惑され、女には全くもてないへっぽこ探偵外内祐太郎を好きになってしまったと言うことかになる。

ほんの僅かしか登場していないドジなへっぽこ探偵のくせに、西沢少年の賢さと、怪盗韋駄天のダンディさを引き立たせるために登場させた道化役に過ぎないのに、都合上、最後に美しい令嬢、瑠璃子さんの心を掴むという、一番美味しいところを掠め盗っていく外内祐太郎が憎々しく思えた。

「リンゴを買ってきたから食べますか？」

おそらくは従弟の博史君に買いに行かせたリンゴなのだろう。

「え・・・あ、ああはい、食べます」

外内祐太郎はのぼせ上がり顔は真っ赤である。

瑠璃子さんは果物ナイフでリンゴの皮を剥くと、

「はい、あんーんして」と食べさせる。

「あーん」リンゴを美しい瑠璃子さんに食べさせてもらい、外内探偵は鼻の下をこれでもかと伸ばしきり、完全にでれでれである。

だんだんと仲良くなっていく二人を見せつけられ、西沢少年は羨ましく思った。

完